
スノーチャイルド

杏羽らんす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スノーチャイルド

【Zコード】

Z9979W

【作者名】

杏羽らんす

【あらすじ】

夏だというのに町では異常気象といって差し支えないほど寒い日が続いていた。ある日、学校の帰り道で主人公は白い和服を着た女性と出会う。しかし彼女はなぜか衰弱しており、心配になつた主人公はいつたん彼女をアパートへと連れ歸ることにする。回復したその女性は、自らを雪女だと称し、さらには主人公のアパートに居座ると言い出して

夏だというのにここ数週間は寒い日が続いていた。

ただし、これは冷夏ともまた違う。

冬が去り、やがて春が訪れ、それが去つたと思えばまた冬に逆行しつつあるような寒さ、というのが適切だ。

それでも人というのは環境の変容に対して柔軟に対応できるものである。寒いとはいえ真冬の凍てつくような寒さほどではないため、適当な上着を一枚羽織れば凍えるまでには至らない。

夕焼けと群青の混ざった中途半端な、ある意味では幻想的とさえ言える色合いの空から寒風が流れ行く。

寒空の下、アスファルトの街路を一人の学生が歩いていた。高校での授業を終え帰宅途中の一人は、ときおり吹く寒風にスカートをなびかせながら歩を進める。

「風が冷たいわね、今日も」

一人は、風でなびくスカートを鞄で軽く押さえながら歩く小柄な少女 神谷魅魚かみや みおである。童顔ながらも凛として落ち着いた表情は、むしろ大人びた印象を漂わせる。

そしてもう一人は、

「あ、あう……」スカートが風に揺れることを過剰なまでに意識してしまって、顔を真っ赤にしながら裾を押さえることに必死な早乙女凜さおと めりん。

（もう、魅魚がこんな提案しなければ……）

心の中でそう呟く。凜は魅魚の持つとある趣味に対し、非常に迷惑していた。

「あら」

背筋を伸ばし堂々と歩く小柄な少女 魅魚が冷静な、それでいて悪戯を楽しむような口調で言つた。微声ながらも力強い、涼やかな声音で、

「もつと顔をあげて歩きなさい。せっかくのかわいい顔がもつたないわ」

同時に寒風が吹いた。肩にかかる辺りで揃えられた、漆を塗ったようになにか艶やかな魅魚の黒髪がわずかに揺れる。

きれいに切り揃えた髪。整った顔立ち。小柄で華奢だが姿勢の良い体躯。魅魚はまるで精巧をきわめた日本人形のようであつた。「そんなこと言われても、恥ずかしいものは恥ずかしいんだよ……」対し、凛は力無く返答する。

「まったく……」

もじもじして俯いたままの同級生の姿を情けなく思つたのか、魅魚は呆れた顔で、

「凛」

名を呼び、ぴたりと足を止めた。

そして凛の方へ振り向くと、おもむろに凛のはいているスカートの裾を掴み、ぐいぐいと引っ張つてみせた。

「わつ、や、やめてよつ！」

膝上を開放されかけ、素足の肌色がちらりと覗く。凛はスカートを慌てて抑え込んだが、その顔は羞恥心からか真つ赤に染まつている。

「うふふ。ウブなのね。かわいいわよ」

魅魚は口端を僅かに上げて小悪魔じみた笑顔を浮かべた。その表情からは悪戯心とささやかな悪意が放出されている。そのうえ冷静沈着な雰囲気を漂わせているのだからさらに性質が悪い。付き合いはまだそれほど長くないが、魅魚に嗜虐的な趣向があるのは間違いないと凛は思う。

「もう、困るよ。本当に……」

人を食つたような性格の魅魚の振る舞いに、凛はいつも参らされ

てばかりだ。身長は凛の方が高いため、物理的には凛が魅魚を見下ろす状態になるものの、しかし精神的には、魅魚が見下ろし、凛が見上げているような感覚である。

と、前方から歩いてきた若い男が、一人に声をかけた。

「ねーねーねー。キミたち、かわいいね。学校の帰り？ 一緒に遊ばない？」

サングラスを外しながら軽薄な口調で言うと、男はニヤリと口端をあげた。派手な服とアクセサリで身を固めた、いかにも今時の若者といった風貌の男だった。歳は、高校一年生の凛たちより、一二うえのよう見える。大学生……だらつか。

男は一人を舐めるような視線で見る。足先から頭頂まで、身体のパーツ毎に順にチェックするように移動した視線は、魅魚を見終え、次に凛の気弱そうな顔を直視したところで停止した。

「あつ……あの……」男の発する威圧感に凛は委縮し、一步後退する。

これは言うまでもなくナンパである。にやつく表情を見る限り、やましいことを考えているとしか思えない。

「いや、あの……その……えっと……」

突然の慣れない出来事に混乱してしまい、凛は言葉に詰まってしまった。

そんな凛の様子を見兼ねて一歩前へと出、冷静に切り返したのは魅魚であった。

「わたしたちにはあなたのような下衆と遊んでいるヒマはないの。悪いけれど別の、もっと尻の軽そうな女を当たつてくれないかしら」

冷たく重みのある彼女の語調に、今度は男が後退した。そして、あからさまに不機嫌な顔になると、

「ちつ……！ ふ、ふん！ ちょっと顔がいいくらいで……。いい気になつてんじゃねーよ」

馬鹿にされてその気をなくしたのだろう。もしくは魅魚の気迫に気圧されたのかもしれない。男は吐き捨てるように言い残して、その場を去つて行った。

「まったく。典型的な雑魚ね」

小さくなつていいく男の後ろ姿に向かつて悪態を吐き、「でも、わかつたでしょ」

再び振り向くと魅魚は凛の顔を見据える。

すつと腕を伸ばし、凛の鼻の先に向かつてひとさし指を立てた。

「あなたは、かわいいのよ」

ふふ、と満足そうに微笑し、魅魚はその手を開くと凛の肩にぽんと置いた。

凛はその動作に「観念し」、「いつメッシュージを感じ取つていた。

「そ……そんな……」

「もつと顔をあげて胸を張り、その魅力を振りまいて歩きなさい。元々かわいい顔に、わたしが化粧をしてあげたのだから鬼に金棒じやない。その制服だつて、似合つているわよ」

「そ、そんなの無理だよ……」

追い討ちをかけるように言葉を続ける魅魚に、凛は弱々しい一言でなんとか抵抗を試みる。しかし魅魚はまったく引かない。

「どうするの、そんな弱氣で。座右の銘は『何事からも逃げない』でしょ」

「そ、それと、これとは……話が別だよ……一 といつか、おかしい……よ」

凛は伏せてばかりだった顔をなんとか上げ、じつと魅魚の顔を見つめた。

そして、吐露するよひに言ひ。

「僕……男なのに」

凛は非常に迷惑していた。

魅魚の持つ『女顔の凛を女装させる』といつ趣味に。

1／雪降りの夏

都会と田舎の中間のよつな、派手でもなければ地味でもないとい
う中途半端な地域 霞町^{かすみちょう}。そこに建てられた県立校が、凛の通う
霞西高校である。

ここ数週間、冬のような気象が続いているため忘れがちだが暦の
上ではすでに七月に入っている。もうすぐ夏休みという時期のせい
か、生徒たちの顔も心なしか晴ればれとしていた。

霞西高校は一学期制をとっているため定期試験は夏休み明けに行
われる。そのためテストのことを気にしている生徒も少数で皆が思
い思いに高校生活を満喫している。

現在、時刻は正午を過ぎ　　昼休み。

凛の在籍する一年三組の教室では、他愛もない雑談を楽しむ者、
机を囲んで昼食をとっている者、机に突っ伏して寝ている者とい
う風に過ごし方は様々だ。

その中でなら凛たちは雑談を楽しむ者に分類される。クラスメイ
トの幸太郎^{こうたろう}と一緒に昼食をとり終えた凛は、その後にやつてきた魅
魚を交えた三人で談笑をしていた。

「ほう？　凛よ。おまえ、ナンパされたのか……。となれば、もち
ろん……ついていったんだよな」

さらりとした前髪を指で弾くと、幸太郎は不敵な笑みを浮かべた。
凛、幸太郎、魅魚の三人は、高校入学からの　つまり一年と数
ヶ月程度の付き合いではあるが仲は良く、普段から一緒にいること
が多い。

「残念だけど、わたしが追い払ったわ。その領域は、まだ凛には早
すぎるでしょ」

凛に代わって答えたのは魅魚だ。仲が良いといつても力関係まで

等しいというわけではなく、三人の中では魅魚の権力が最も強い。

「焦つて先走つても、満足のいく結果は出せないわ」

そう言つと、手にした紙パック 中身は魅魚の持参したアボカドジュースだ のストローを「はむ」とくわえる。ちゅーと飲み始めると、後は我関せずといつた雰囲気を醸し出した。

「ふーむ、そーか……。確かに、物事は順序が大切だな。一步一步、着実に段階を踏んでいかねば、凛のよつた弱々しい男はたちまち道を踏み外し、転げ落ちてしまうだろう。なーに焦ることはない！人生は長いのだからな！」

ふはは！ と無駄に凛々しい笑い声をあげながら幸太郎は凛の背中を叩いた。

「ま、待つてよ。ぼ、僕は、男の人と……その、そういう趣味はないよ。うん、無い。まったく」

凛はたじろぎながらも慌てて反論する。

魅魚に女装させられているときは恥ずかしさのあまり弱々しさが目立つ凛だが、まともな服 今なら学生服 を着ている普段の状態であれば普通に会話できる。とはいえ気が弱いという根本的な部分ではさほど変わりないのだが。

「なるほど！」

合点した、と手を叩く幸太郎。

「つまり、女性とならしたい、と。喜んで御受けすると。さあボクをメチャクチャニシテ！ と。そういうわけだな。はつはつは！なーに恥ずかしがらんでいい。お前もそういう年頃というだけだ」「不潔なのね、凛つたら。幸太郎は汚物だけど」

幸太郎の揚げ足を取る言葉に、すかさず魅魚が加勢する。実際のところは幸太郎にまで攻撃が及んでいるのだが、本人は気にしていない様子である。

「そ、そういう意味じゃないよつ！ 誤解だ」

一対一。完全に劣勢に立たされてしまった。これではいつものようになり倒されて休み時間が終わってしまう。

三人の力関係は魅魚を中心に、日によつて一つのパターンにわかる。すなわち、凛が弄られるか、幸太郎が弄られるかである。

今日は凛がその餌食になつてしまつたようだが……。

それでもなんとか反撃しようと、凛は幸太郎の顔を指さし口撃を試みる。

「ば、僕ばかり女好きみたいに言つけど、幸太郎の方こそ、女人に興味があるから、そういうことを言つんじやないの?」

何とも単純な発想だがそれゆえに的を射ていて効果的もある。これでどうだ、と凛は満足げな顔を浮かべた。さらにもうひと押し、言葉を付け加える。

「女好きなのは幸太郎だ!」

「そうだぞ」

平然、の一文字に尽きる。あつさりと肯定されてしまった。

「変態ね」魅魚がぼそつと呟いたが、幸太郎はそれにも動じなかつた。

「ああ、オレは変態だ。趣味が女体研究なのだからな。だが、人間としてやつていいことと、いけないことの区別はつけている“つもり”だから安心するがいい」

つもりの部分を強調しつつ自信満々に胸を叩き、流し目でウインクする。正直言つて気持ち悪い。

「うう……」

凛が抵抗を諦め、会話の流れも止まる。

焦つていたために忘れていた。幸太郎は自身を変態と公言して憚らない人間なのであつた。せつかく反論した凛だったが、その効果は皆無で終わり、それどころか変に幸太郎をパワーアップさせてしまつた風でさえある。

「おう、そうだ」

何かを思い出したように幸太郎は椅子から立ち上がつた。腰に手を当てたポーズを取り、魅魚の方を見る。

「ところで神谷よ」

「なにかしら」

魅魚は興味なさげに、幸太郎の方は向かず声だけ返答する。
「おまえのその陰湿かつサディスト的性格を内包するにはアンバラ
ンスな口ぶりな肢体についてじっくり研究したいとオレは思つてい
るのだ」

教室内だというのに幸太郎はとんでもないことを堂々と口にした。
教室のどこかから「また幸太郎よ」「本当に変態ね」「近づかない
方がいいわ」などと囁きが聞こえてくる。

一緒にいる凛の方が真っ赤になつてしまつ。なんでこんな男と友
達なのだろうと凛はあらためて自分の交友関係に疑問を抱いた。し
かし、

「……具体的にはどうしたいのかしら」

相手にしないかと思いきや、魅魚は拒絶することなく、むしろ前
向きに話を進めるような返事をした。チャンスとばかりに目を怪し
く輝かせて、幸太郎は答える。

「ふむ。そうだな……。誰もいない放課後の教室でおまえの肢体に
触れさせてくれ。入念に、丹念に！ ああ、それと記念に！」
「この男には理性だと恥じらいだとかという感情は無いのだろう
か。凛は口をあんぐりと開けて一人のやり取りを傍観していた。

「いいわよ」魅魚がまさかの了承をした。

「なに！ 本当か！」幸太郎の表情も爛々と輝く。

「ええ。けれど条件があるわ」

魅魚はアボカドジュースのパックを机に置き、ニヒでやつと幸太
郎の方を向いた。

そして、じつと幸太郎の目を見据える。

「わたしに触れる前に、あなた、自害しなさい」

「ぬわあにい！」

幸太郎は両手を上げて身体をのけ反らせる。オーバーリアクショ
ンとしか思えない、しかし素の驚きを見せた。

「わたしの肢体に触れたいのなら、まずあなたが死体になれといふ

ことよ」

「触れたい……。しかし、触れるためには死ななければならない。
しかし、死んでしまっては触れることはできない！ ぬぬお……な
んというパラドックス！ ああ……」

そして頭を抱え込み、なにやらぶつぶつと呪文のよう」「肢体
……自害……死体……肢体……したい……シタイ……」と繰り返して
いる。

教室のどこからかから「また幸太郎君が負けたのね」「さすが魅魚ち
ゃんだわ」「幸太郎なんて本当に死ねばいいのよ」と囁き声が聞こ
えた。

「ふふ」

魅魚が微笑し、凜の方を見た。

「この男みたいに積極的な変態になっちゃダメよ。でないとあなた
を女装させる楽しみが半減してしまうもの。嫌がるあなたを無理矢
理女装させるところに醍醐味があるのだから」

あなたも充分変態です、と言つ度胸は凜には無かつた。

「僕は、女装なんて好きじゃ……」

ない。と言おうとしたが、しかしそれは意味がなかつた。魅魚は
聞く耳持たずと言わんばかりに明後日の方角を向いて、再びアボカ
ドジュースを飲み始めていた。

「なあ」

不意に、うすくまつっていた幸太郎が立ち上がつた。

「凜よ。部活の方はどうなんだ」

「部活？」オウム返しに凜は聞き返す。

凜は剣道部に在籍している。実力はそこそこといったところで、
大会では二三回戦あたりまで進出できる程度だが。しかし帰宅部の
幸太郎がなぜ剣道部のことを気にするのだろうか。

「夏の大会に向けて、試合に重点を置いた練習をしているくらいで、
とくに変わったことはないけど」

「違う、そうではない。練習の内容などどうでもいい。練習のとき

の様子だ。最近はやけに寒い日が続いているだらう。となれば、だ。剣道部の女子部員たちはどういう悩みを抱えていると思つ」

霞西高校の剣道部は男女合わせても人数が十人程度のため練習は合同で行つてゐる。凜は実際の練習風景を思い出し、推測してみることにするが、

「うーん……。夏なのに寒いねーって言つてゐるくらいで……。これといって変わつたことはないよ」

事実その通りで、なかには「例年なら夏の暑さで防具が蒸れるところを今年は寒いおかげで回避できる」と喜んでゐる者もいるくらいだ。

何か問題でもあるのだろうかと不思議に思つてゐると、幸太郎が鼻で笑つて言つた。

「ふ、当事者だからこその認識の薄さか……。まだまだ甘いな。よいか……！」

そして街頭演説でもするかのような身振り手振りを交えて熱弁する。

「この寒さで、剣道場の床は凍つたように冷たくなる。足の裏が冷えてしまい、冷え性の女子たちはまともに練習できまい！ となれば、この不肖幸太郎！ かの豊臣秀吉が主君の草履を温めたように、女子たちのおみ足を温めるべく、この手でスリスリすりすりと」

「本当に不肖ね。愚かだわ。愚の骨頂ね」

錐揉みのように手を前後させる幸太郎の暴走に、魅魚が横槍を入れた。

「寒い日が続いてゐると言つても、凍えるほどじやないでしょ」

ちなみに、魅魚も幸太郎と同様に帰宅部である。

「く……神谷よ。おまえ……オレの心からの善意を愚弄するつもりか！」

重傷を負つた兵士のように胸元を手で押され、掠れ氣味の声で問う。

「ええ、そうよ。それと心からの善意じゃなくて、悪心からの私意

でしょ」

涼しげに言ひて、飲み干したジュースのパックを折り畳む。
「いくら神谷とはいえ、もう許さん！ こうなつたら強引にでもあります」

「捨ててきてしまつだい」

遮り、幸太郎の胸元へぞんざいにパックを突き出す。

「くつ……。神谷とはいえ、女子の頼みは断れん。感謝しろ！」「悔しそうに、しかしどこか嬉しそうな表情を浮かべた幸太郎は、紙パックを受け取ると駆け足でゴミ箱へと向かつていった。

「ねえ、凜」

視線を逸らすよつに流し目を教室の隅に向けつゝ、魅魚は凜の名を呼んだ。

「なに？」

「忘れないうちに言つておきたいから、いま言つわ。放課後、部活動が終わつたら、この教室へ来て。教室に誰もいなくなつてから。一人で」

「えつ……？」

そのとき、タイミングを見計らつたかのよつに午後の授業開始の鐘が鳴つた。

魅魚は、ゆつくりと椅子から立ち、自分の席へ戻る。放課後にひとりで教室へ？ それはどうして……

小さな彼女の背に向けて問いかける。

魅魚は凜の方へちらりと顔だけ振り向き、

「後で。それに……わたしにだつて、心の準備が必要なのよ。淡い微笑みを浮かべて、魅魚は自分の席へと戻つていった。

竹刀が面を捉える乾いた音が剣道場に炸裂する。

その清々しい快音は幾度となく繰り返され場内に反響している。選手が力強く踏み込むたびに、拍を刻むように重低音が鳴り渡る。霞西高校の剣道場はテニスコート四つ分ほどの大きさを有しており、十数人程度の部員が使うにはやや広く物寂しさを感じる。

数年前までは部員も多かつたのをどうぞ良し広さだったのだが、最近では減少傾向にあるため現状の様になってしまっていた。

しかし人数が少ないながらも部員たちは活発に活動を行つており、当然、凛もそのうちの一人であった。

道着の上に、面、胴、籠手、垂れと一式の防具を装着した凛が相手と向かい合つている。男子の中では平均よりやや低めの身長の凛だが、剣道具に身を包めば、なかなか様になつている。

竹刀を中段に構えた。

「やああつ　！」

大きく掛け声を上げ、相手との間合いを詰める。竹刀を振り上げる。

「　面ツ！」

勢いよく踏み込むと同時に振り下ろした。竹刀は相手の面上で飛び魚のように跳ね、飛沫のごとく汗が散る。同時に場内に一際大きな快音が響いた。

相手の脇を颶爽とすり抜けていく。

立ち止まると、身体を反転させ向き直る。

そして再び中段。打突後も油断せず、相手の反撃にすぐさま対応できる心と身の構え　　残心を示した。

「よーし、やめ！　今日はこのあたりで終わりにしますつ

道場に、甘くも凛々しい女声が響いた。それは部長　　雨宮の声

だ。最上級生である三年の部員は女子しかいなかつたため、必然的

に女性が部長を務めることになった。その中で彼女が選ばれたのは、雨宮の母性的な性格と、充分な剣道の実力から推薦されたためである。

部員それぞれが所定の位置へつき正座、礼をすると、防具を外していい。

「ちょっとといいかな、早乙女くん

面を小脇に抱えた雨宮が凛に声をかけてきた。

早乙女と苗字で呼ばれると何だが女々しい気分になってしまって、あ、と凛は心の中で苦笑しつつ、

「はい。なんでしょう、雨宮先輩」

慌てて、外しかけだつた面と、頭に被つていた手拭いを取り去り脇に置いた。

雨宮は、額に浮いた汗を手で拭うと、うーん……と唸りながら、「あのね、悪くない動きではあつたんだけど……その、なんというか、今日の早乙女くんの打突には迷いがあつたかなあつて。集中力が欠けているっていうのかな……何か、他に考え方でもしているような感じかな。ねえ、なにかあつたの?」

凛自身の手応えとしては決して悪くはなかつたつもりだが、雨宮の目にはいつもより鈍っているように見えたのだろう。

雨宮との付き合いはそれほど長くはないが、彼女は人の感情などの機微を察知する能力にたけているという印象が強い。

「い、いえ……とくにそういうことは……ないと、思います」

「そう……。それならいいんだけど……。うん、調子の良し悪しは誰にでもあるもんね。だけど、何かあるんなら、早めに解消した方がいいぞっ？」

凛を気遣う言葉を投げかけ、にっこりウインクを飛ばすと雨宮は軽い足取りで剣道場を後にした。雨宮は男女隔てなく接し、後輩の面倒見も良い。

女子部員全員が道場を出たのを確認し　女子は防具だけ道場に置いていき部室棟の一室で着替えを行っている　凛は道着を脱い

だ。そして、制服へ着替える。

(他のことを考えている……か)

先ほどの部長の言葉を頭の中で反芻する。

部長には何もないと言つたが、実際には思い当たる節があった。

それは、神谷魅魚のことである。

(わざわざ放課後に呼び出して……いったい何の用だひつ)

それも部活が終了してから、他の生徒がいないときによつて条件付きたある。わざわざそんなシチュエーションにして、どんな話があるといつのだらう。

それに、魅魚は「わたしにだつて、心の準備が必要なのよ」とも言つていた。

あの言葉が意味するものは何だらうか。単純に考えればそれは……。

(ま、まさか……！」、告白………？)

あんな性格でも魅魚は一人の女子高生なのだ。もしかしたら、態度では掴み所のない悪戯な女子を演じていても、心中では凛に好意を寄せているのかもしれない……などという考えが頭を過ざる。

(いや、でも……)しかし、もしそうだつた場合、どう答えればいいのだろうと凛は新たに悩みだす。

魅魚とは仲の良い　散々いじられてはいるが　友達だ。しかし、それ以上の存在として考えたことなどなかつた。魅魚の普段の行動が行動なので余計に。

好きか嫌いかで言えば、もちろん好きだが、それと恋愛感情はまた別物だ。友達以上の存在として見ることはできない。

凛の想像は加速していく。彼女は自分のことを好きなのか……？
(……つて、そんなわけないか。あの魅魚に限つてそんなわけないよ)

凛は高校にあがつてからはとある事情で一人暮らしをしている。そのせいで最近やけにひとりが寂しいと感じるようになつていたからなのか、あり得もしない想像をしてしまつた、と凛は自分をバカ

バカしく思つた。

けれど、高校生が放課後に異性を呼び出す理由に、他に何があるだろうか。

もちろん可能性だけならこゝらでもあげられるが、しつづくる
答えはいまいち浮かばない。

(とにかく、行ってみよう)

ここで考えていても埒があかない。凛は他の男子部員に挨拶する
と道場を後にした。

到着すれば、すでに教室には神谷魅魚の姿があった。他の生徒はもう残っていない。

窓辺に手を置き、外を眺めていたようだ。風に揺れるカーテンが魅魚の姿を僅かに隠す。

教室には橙色の陽光が窓から差し込み、放課後の気だるさと懐さを漂わせていた。そんな教室に一人佇む彼女の姿は、どこか神秘的でさえあつた。

「待っていたわ」

魅魚は窓辺から離れるように数歩進み、窓際近くの机 それは

魅魚の席である の前で立ち止まる。

「もう……心の準備も、できたから」

小柄で幼げな容姿から想像できるものとは正反対の大人びた口調。凛にはそれがいつもとは違つた悩ましい魅力のある声に感じられた。もしかしたら告白されるのでは……などと考えていたからだろうか。

高鳴る心臓の鼓動を感じつつ、凛は教室の中へと踏み出す。

そして、魅魚の前に立つた。

「用事つて、なに……かな」

「……うふふ」

魅魚は妖しく微笑み 。

机にかけてあつた鞄を手に取り、机上に置いた。そして中から、とあるものを取り出す。

「え……？ えええつ！」 凛は声をあげて驚いてしまつたが、それも無理はない。

魅魚は、取り出したものを広げ、誇らしげに掲げた。

それは女子用のスクール水着で、

「着なさい」
などと言つたのだから。

結論から言つと、凛はスクール水着を着るのは断つた。

スクール水着を着て下校するというのは、男としてという問題以前に人間として踏み越えてはいけない一線だと頑なに主張し続け、なんとか却下した。

魅魚は「せつかく、独自のルートであなたの体格に合うスク水を調達したのに……残念ね」と文句を言つていたが、最早そんなことは関係ない。

ちなみに、彼女の言つていた心の準備とは『凛を女装させる』といつ自分の趣味のため、凛に人の道を踏み外させてしまうことを決心する、ということだつたらしい。

そんなこと勝手に決心しないでよ！ と、いつも言いくるめられてしまふ凛のわりには一所懸命の抵抗を見せて、何とか災難を逃れたのだった。

しかし。

帰路についた二人は、ともに女子制服姿である。

魅魚に「スクール水着を着ないなら、代わりにこっちを着なさい」と渡されてしまったのが、数日前に着せられたものと同じ、霞ヶ丘高校の女子制服だった。これも魅魚が独自ルートから調達したものらしい。

頑張つて断つたとはしたものの、はじめにひとつ頼みを断つた手前、次もまた断るのは気が引けるという心理が働いてしまい、なおかつ巧みに言いくるめてくる魅魚の話術によつて、結局このあり様なのだった。

放課後で時間も遅くなつていたため、人目に付くことなく学校を出ることはできたが、それでも凛の羞恥心はかなりのものだった。真っ赤にした顔を俯かせ、ためらいがちな足取りの凛を見て、魅

魚は非常に満足そうではある。凜の恥ずかしがる様子が魅魚の嗜虐心を刺激しているのではないだろうか。

「ほり、見なさい。あなた、化粧してなくても充分かわいいわよ」

言つて、折りたたみ型の手鏡を差し出す。

渋々受け取り、凜は鏡を見た。

当たり前だが、そこには凜の顔が映し出されている。髪型は魅魚の手によつて、ヘアピンで前髪を左右に分けて額を出したものに変えられている。即席ではあるものの、女顔の凜にはぴつたり似合つていた。女子生徒らしく、可愛らしく見せるという意味において。

「うう……」自然と、悲観的な呻き声が漏れた。

よくよく考えてみれば女子の制服を着て外を歩くのだって、充分に人としての一線を越えているのではないだろうか……と凜の頭に一抹の不安が過ぎる。

（だけど……）

鏡を見ながら凜は思つた。

（僕つて、本当に女人みたいな顔をしているなあ……）

普段は特に何も考へない無造作な髪型だが、今は魅魚によるアレンジが加えられている。

髪を下ろし、クシで丁寧に梳いたあと、ピンクのヘアピンで前髪を留めただけの簡単なものでも、充分に女性に見えるのだ。肌がきれいといつもあるが、顔の造りそのものが女性的だ。

中性的ともまた違つた、まるで男の子の顔として描き始めた絵を途中から女性に書き直したような、そんな顔立ちだった。

（なんで僕はこんな顔なんだろう……）

決して自分の顔が嫌いなわけではないが、それでも不思議に思う気持ちちは確かだつた。

「どうしたの。黙りこんで」

魅魚の声に、はつと気づけば、そこは交差点だつた。

「それじゃ、わたしはあっちだから。また明日ね。うふふ」

楽しそうに、策士めいた笑みを浮かべると魅魚は交差点を渡つて

いく。後ろ手に組んで鞄を持つ小さな後ろ姿が、さらにも小さくなつていいく。

ぱうつとしたまま魅魚を見送り、彼女の姿が見えなくなつたところで、凛はひとつ的事実に気がついた。

「どうしよう……！ 僕、ひとりだ」

この状態で、男が女装して外を歩いていることがバレたらどうなつてしまふのだろう、と不安が急激に膨らみ胸の内を制していく。寒いからか今は幸いにも通行人はいない。ときおり車が通り過ぎるが、さすがに車内から気付かれることはないだろう。しかし、いつ誰がここを通りてもおかしくはないのだ。

もし気づかれれば通報されてしまうだろうか。「きやー変態よー誰かー」と警察に連絡され、しまいには『女装好き高校生、街を練り歩く!』なんて報道をされてしまうだろうか。そうなつても元凶である魅魚はくすくす笑つて傍観者に努めそうで怖い。

そんなことを考え、凛は最も単純な結論『とにかく急いで帰る』を導き出した。

鞄には自分の学制服が入つているため、公園のトイレにでも駆け込んでそこで着替えるという手もあるが、公園へ行くには今来た道を戻る必要があるし、ここからなら自宅のアパートの方が近い。他に着替えができるような場所も思いつかない。さすがにコンビニやファーストフード店のトイレを借りるわけにもいかない。

（トイレで変身するヒーローってけつこう大変なんだなあ……）

凛は、微妙にズレた感想を抱きつつ、家へ帰るべく歩き出した。ふと、胸が苦しくなつた。

（ああ……）

凛は胸に手を当てる。決して肉体的な痛みがあるわけではない。これは一人になつたことによる孤独感が生み出す精神的な心の痛みであつた。

ときおり凛の胸はこのように痛みだす。それは決まって心が独りを感じたときだ。

ときおり凛の胸はこのように痛みだす。それは決まって心が独りを感じたときだ。

凛は幼い時に両親を亡くしている。親戚に引き取られるという家庭環境で育ち、その延長で今は一人暮らしをしている。そんな背景を抱える心の孤独が引き起こす心因性の痛みなのだった。

昔はとくに酷かった。友達のいなかつた凛は常に孤独状態にあり、常に胸の痛みに苛まれていた。高校へと進学した今でこそ、魅魚や幸太郎という友人ができ、痛みが発現することも少なくなつたが、それでも完全に解消されたわけではない。

友人ができた今でも、心のどこかで一人ぼっちを、孤独を感じてしまうのだ。それは凛の求めている安らぎが友人関係よりさらに深い心の繋がりからでないと生まれないものだからなのかもしれない。

「気にしちゃいけない。早く帰ろう」

凛は手で胸をとんと叩き、頭を左右に数回振る。それを気分転換がわりにして、再び歩き出した。

と。

「え？」

鼻の頭に冷たい感触がした。小さく柔らかい何かが落ちてきたようだ。水のようで、それでいて形のある冷たいもの。

それが空から降つてきたのだと気づき見上げれば、

「こ、これは……？」

雪が降りだした。

いつの間にか曇天のため灰がかつっていた空から、真っ白な無数の雪が音もなく舞い降りていた。

凛は疑問に思つた。当然である。確かにここ数週間は寒い日が続き、日を追うごとに冷え込んでいくようになつてきていたが、それでも季節は夏だ。七月初旬のこの時期、雪が降るというのは度が過ぎている。異常でしかない、と考えた。そのとき。

ふと、視線を感じた。

凛は、前方に誰かがいることに気づき、顔をあげる。

「な……っ

凛の位置からほんの五メートル分ほど離れたところへ、横断歩道の真ん中に一人の女性が立っていた。

彼女はゆっくりとこちらへ向かってくくる。

ひと目見て、普通じゃないと感じた。

その女性は裸足で、純白の和服に身を包んでいた。色が白という点もそうだが、それだけでなく大きなスリットが入っているという点でも変わった和服であった。光沢のある黒い帯もまた、白い和服によく映えている。

「…………

一步。

無言のまま女性はゆっくりと近づいてくる。スリットからのぞく白い足は、今降っている雪と同化してもおかしくない程にまばゆく優美な白。

そして最も特徴的なのは、腰まで伸びた銀色の長髪だった。鮮やかな銀のそれは決して老いややつれを感じさせる白髪のよつなものではなく、彼女の美しさを飾り立てるように寒風に乗って優雅に揺れていた。彼女の姿はあまりにも美しく妖艶で、異質さに危険を感じつゝも、思わず見惚れてしまつほどだった。

「…………

また一步。

年上なのは間違いないが、具体的な年齢はわからない。美少女と美女の中間のような、どこか可愛らしさを残した端正な顔立ち。その瞳には髪と同じ銀色の光が宿っていた。

不思議な光を奥に宿した銀の瞳。

いや、光つて見えたのは気のせいだったかもしれない。しかし、そう感じるほどに美しく透き通った、まるで人の心を吸い込み虜にしてしまつような、妖しい光。

いつの間にか、その女性は凛の目の前に立っていた。

目と鼻の先に、圧倒的な美を持つ彼女の顔がある。しかし、その

表情はどこか虚ろで 。

「 ！」

女性の銀色の瞳に強く見据えられた瞬間、まるで身体が凍り付いたように動かなくなつた。

逃げ出したかつた。しかし、逃げられない。足は動かない（まるで凍つて……）。身体も動かない（凍つてしまつたみたいだ……）。

「あ、あ……あっ」声にならない声で凛は必死に叫びをあげる。

氷のような冷たさを感じさせる銀色の瞳、美しい銀の髪、凍り付けるように相手を動けなくする力、雪を背景に佇む純白の和服姿。凛は思った。

まるで 雪女じゃないか、と。

そのとき女が小さく口を開いた。

金管楽器のように透き通りながらも、しかし衰弱しきつた声で、
「飯を……くれ」

早乙女凜はアパートでの一人暮らし。

幼い頃、凜は両親とともに雪山へ登山に行つたのだが遭難してしまい、その事故によつて両親は他界した。それ以来、ひとり残された凜は田舎に住む祖父からの仕送りを受けながら生活している。中学卒業までは親戚の家で面倒を見つもらつていだが、高校入学を機に一人暮らしを始めた。

いつそのこと田舎で祖父母たちと暮らそうかと考えた時期もあつた。

しかし、そこから通える学校がなかつたため、高校を卒業するまでは霞町で一人暮らしをするということで落ち着いた。

アパートは八畳一間と学生が一人で暮らすには充分なものだつた。仕送りの額にも不満はなく家賃や生活費には困つていながら、祖父に何故それだけの資産があるのかを凜は知らない。

「えつと……食べもの、食べもの……」

凜は冷蔵庫を開けた。交差点で出会つた女性に食べ物を出すためだ。彼女は今、凜の部屋で待機している。

出会いこそ恐怖を感じさせられるものであつたが、危害を加えてきたわけではないし、何より彼女は非常に衰弱しているようだつた。そんな相手をむざむざ見過ごすことなど凜の性格ではできるはずもなく、肩を貸して自分のアパートまで連れてきたのだった。

「うわあ……何もない。そういえば、今日の帰りに買い物に行こうと思っていたんだっけ」

魅魚の謀略や、交差点で出会つた美女のことですっかり失念してしまつていた。

冷蔵室にあるのは烏龍茶と、魅魚が遊びに
来たときに出すためのアボカドくらいだ。

アボカドは一応魅魚の所有物となつてるので勝手に出すわけにはいかないし、烏龍茶は凛の物だが飲料で空腹を満たせとこつのはさすがに酷だ。

「となると……」

凛は冷蔵室の扉を閉め、上の段の扉へと手を伸ばす。冷蔵室になら何があるかもしれない。

扉を開けば、ひんやりとした冷気がゆっくり漏れ出て顔を撫でていぐ。

一瞬、交差点での出来事を思い出した。あの女性が田の前に立つていたときと似たような感覚を覚える。

「好き嫌いとか、あるのかな」

中には何種類かの冷凍食品がある。

数秒考えた後、中からロロシケとチャーハンの袋を取り出した。特に変わった食べ物ではないのでどちらでも構わないと言われそうだが、苦手といつ可能性も否定はできない。どちらがいいか選んでもらおうとという考えだ。

凛は女性の待つ部屋へとむかつ。

「あの、どっちがいいですか……う、うわあー」

引き戸を開けてみれば、女性は部屋の中央でうつ伏せに倒れていた。

思わず息をのむ。

純白の和服を着て、銀の長髪を乱れるように広げて倒れている姿は、まるで死体のように見えたのだ。

「お、驚いている場合じゃない。大丈夫ですか？」

凛は手にした冷凍食品をとりあえずテーブルに置くと、倒れた女性を抱き起こした。触れた身体はとても冷たかった。その冷たさに、

「し、死んじゃった！ ど、どっしょー！」

慌てふためくが……。

「う、うう……」

女性は、辛うじて田を開いた。生きていたようでは安心すると同時に、ここへ連れてくるために肩を貸した時も、彼女の身体がやけに冷たかつたことを思い出す。

数回、田を瞬いた彼女は、端正な顔立ちに備えた美麗な銀の瞳で凛を見ると、

「飯を……」

出会ったときと同様、空腹を訴えた。

「あ、は、はい。あの、どっちがいいですか」

そう言って、一旦テーブルの上に置いた冷凍食品を

「飯いっ！」

取ろうとして、先に奪われた。

彼女は横取りした勢いでテーブルの上へ飛び乗り仁王立ちする。高々とチャーハンの袋を掲げ、下から覗き込むよう向やうら観察していた。

元々この女性に渡すつもりだったので問題はないが、
(よつぽど、お腹すいていたんだなあ)

のほほんと、そんな感想を抱いた凛の田にまさかの光景が飛び込む。

「よし」女性はその場で袋を開けると、中身を取り出した。

まだ冷凍状態のチャーハンを包む半透明の包装に、白く細長い綺麗な指を突き立て 破つた。

「ああー！」

当然の如くチャーハンが散らばった。凍っているため、いくつかのブロックにわかれたチャーハンの塊が、畳の上に飛散していく。

「おお」

女性はそれを拾つがチャーハンの塊はボロボロと崩れ、手からこぼれ落ちる。

「これは……食えぬ」

唖然とする凛をよそにほそと虚しく呟くと、今度は口ロッケの

袋へと手を伸ばした。チャーハン同様、その袋を粗雑に引き破る。だが今回はコロッケである。崩れることも、こぼれることもなく、小判型の、しかしそまだ凍つたままのコロッケが彼女の手中に収まつた。

「ふむ……」

天井に掲げてみたり、見る角度を変えたりしながら、見定めるような表情を彼女は浮かべてゐる。そして、

「いたぐぞ」

一言放ち、ぱくり と。一口で平らげた。

「え？ あ、あの、レンジでチンは……？」

「うむ。美味だ！ これはうまいぞ！」

どうやら凜の問い合わせに答える気はないらしい。

冷凍コロッケ（未解凍）の味に満足したらしく、一ひとつめ、二つめ、三つめ、と手にとり食していく。

どう見てもコロッケは冷凍だ。それには、まるでおしゃいで化粧したかのような白い霜がついてゐる。お腹壊さないかな……と凜は心配になつた。

「おお……久方ぶりに人里へ下りたが、いつも良質な食に巡り合えるとは……」

こつゝの間にか冷凍コロッケはなくなつっていた。すべて彼女の腹の中に収まつたようである。補足だが、一袋につきコロッケは六個入つてゐる。

さすがに全部をあげるつもりではなかつたのだが、とりあえず喜んでいるようなので凜は結果オーライと自分に言い聞かせる。

彼女の要求も満たせたことだし、だいぶ元気になつたように見える。

ここで凜は氣になることを尋ねることにした。

「あの……あなたはいつたい、何者なんですか……？」

至極真つ当な疑問だ。どう見ても普通じゃないことだけは確かだつた。その銀色の髪、その銀色の瞳。放たれる独特的の雰囲気。

「うちか……？」

『う』の方にアクセントを置いた一人称で、このあたりの人間にし
ては珍しい発音だなと凛は思つた。

「ふむ……」

女性は、銀色の目を細めて数秒、黙考し、
「わからぬ！ うちは何者なのだ！」

威風堂々、言い放つた。

「え……」

あんまりな返答に、さすがの凛も顎が外れんばかりに口を開けて
驚いた。

「まあ待て。半分は冗談だ。そう焦るでない」

ぽん、と凛の肩に手を乗せると、にこやかに明るい口調でそう言
つた。彼女を初めて見たときに感じた冷淡で恐ろしい雰囲気とは正
反対の印象だつた。

「しかし、うちのような存在にこれといった明確な呼称が無いのも
確か。そもそも、うちらはそなたら人間のように群れて生きたり、
必要以上に他の生き物に干渉したりすることはせぬのだ。わざわざ
他と区別するための名称など無くとも、それほど気にはならぬしな」
凛は彼女の言葉に違和感を覚えた。「そなたら人間のように」と
いうことは、裏を返せば自分は人間ではないという意味になる。凛
の胸に灯つた不安が少しづつ膨らむ。

「だが……。うちが以前、人里へ下りてきたときには と言つて
も何十年と昔の話だが、そのときにはこう呼ばれたものだ」
彼女は一瞬、かつと目を見開き、

「 雪女だ、と」

潜在意識に恐怖を植え付けるような力のこもつた視線が凛に突き
刺さる。

「ゆき……？」

凛は恐れで身をすくませた。

「はつはつは。そう怖れるな。そなたをとつて食つたりはせぬし、凍り付けにするつもりもない」

安心し、ほつと胸を撫で下ろす。凛をからかつてゐるよつだ。もしかしたら雰囲気とは裏腹に「冗談が好きなかもしけない。」

「でも、雪女なんて……本当に……」

いるのか、と疑いたくなる。まさかそんなものいるわけがないと、目の前にいる女性の異質さを実感しつつも凛の常識が受け入れることを拒む。

「あくまで人間の想像する雪女に近いため、便宜的にそう呼ばれてるだけだ。伝承通りの雪女というわけでもない。しかし、ほぼ同一と思つても、それはそれで間違いでない」

と、彼女は形のいい眉をくいと吊り上げる。

「なんだ。その恐怖に慄くよくな顔は

「い、いえ……そな

凛の心理は見透かされてゐるようだつた。人ならぬ者などという存在を信じられないといつ懐疑心と、もしそれが本当だつた場合に自分の持つていた常識が壊されてしまつ不安だ。

「ふむ……うちが恐いのか。ならば、これでどうだ」そう言つて、軽く指を弾いた。

その音を合図に、彼女の美麗な銀髪が、だんだんと色素を濃くしていき、やがて艶のある黒髪へと変わつた。瞳の色も、銀から茶色へと変わつていた。

田の前で起きた出来事に凛は困惑を隠せない。しかし、最も田を奪われたのはもつと別の点であつた……。

（お、大きい！）

今まで特に何の主張もすることのなかつた彼女の薄い胸がみるみる膨らんでいく、という光景だった。

和服だといふのに、はちきれんばかりの存在感をアピールするその悩ましい胸元。内から押し上げられたために和服ははだけ、見事

な谷間がのぞいていた。

美女と美少女の両方の性質を併せ持つたような顔立ちに、大人の色気を全開にしたその姿は反則としか言いようがなかつた。

「どうだ。できるだけ一般的な人間の姿に似せてみたぞ。これならば、怖くないであろう? 人間の身体のほとんどが水分であるように、雪女であるうちの身体の大部分は雪でできてあるからな。雪を繰る術を使えばこの程度、朝飯前なのだ」

先程とは別の意味で、特定の部分が一般の域を超えてしまつているが、彼女は満足そうに、彼女自身の姿 主に胸のあたりを眺めている。

ただ、確かに姿そのものは異質ではなくなつた。恐怖はいくらか薄らいでいた。

「あの……」

しかし、それで疑問が解決したわけじゃない。彼女は本当に雪女なのか。姿を変貌させるという不思議を起こしだけでも充分納得させるに値するのだが、凛は未だに信じきれない。それを伝えようとして、

「あのー……」

そこで気づいた。

(名前がわからない)

やはり名前を知つていた方が会話も円滑に進む。そう考え、先に名を尋ねることにする。

「あ、あなたの名前を聞いてもいいですか?」

「ふむ。名を尋ねるならば、まず自ら名乗るのが礼儀というものだぞ」

「あ……。す、すみません

はつとして凛はぺこぺこと頭を下げた。

「えつと、凛です。早乙女凛つていいます」

「早乙女? そなた……いや、まあよい。うむ。凛か。よい名だ。では、うちの名だな……」

黒髪へと変わった美女は、じばし沈黙し、

「わからぬ！ うちの名は何だ！」

思わず凜は目を丸くした。

「ま、またですか？」

「んーむ……。あまりうけなかつたか。まあ、落ち着け。『冗談だ』さつきと似たようなやり取りのあと。

「これも人里に下りてきたときの話なのだが……。そのとき出合つた男に、雪音という名を頂いた。以来、うちはそういう名乗ることにしておる。なかなか芯のある良い男だつたな」

雪音は天井を見上げ、懐かしむような笑みを浮かべた。

「ゆきね……さん、ですか」

彼女の名を口にしてみる。なんだか曖昧に、漠然と懐かしい響きを感じた。

と、急に雪音が顔を近づけてきた。

田と鼻の先。それこそ鼻の頭がくつつきやつなほどに近い距離。思わず心臓の鼓動が速くなる。

「どうした。ぼけーっとしあつて。……おおー、まさか……。そう

か。そなた、うちに名を与えた男のことが気になるのだらつ？」

どうやら雪音には、凜がその男性について考えているように見えたらしい。

「あ、え、えつと」

田の前で煌めく美顔に氣を奪われ言葉を失つてしまつた。

嬉しそうにほほ笑む雪音の顔は綺麗なだけでなく人懐っこい魅力があつた。

突然縮められた距離に口惑い、言葉を返せない凜に構わず雪音は続けた。

「なに、顔はたいしたことない。しかし男氣のある奴だつた。うちが男で唯一、他愛もない会話をすることを許可した者だからな。会えば……そなたは惚れてしまふかもしけねぞ？」

ははは、と茶化すように笑みを向けてくる。……しかし、それよ

りも凜は、彼女の言葉に覚えた違和感の方が気になった。

「さて。まだ、うちが雪女だと信用できぬのである。見せ物ではないから一度限り。その目を見開いて、とくと見るがよい」

雪音が茶色へと変わった瞳を閉じる。次の瞬間には、だんだんと黒髪が銀色へと戻り始めていた。そして完全な銀髪へと変わると同時に、

時。

かつと田を見開いた。

そこには、あの銀の瞳が爛々と揺れていた。

銀の髪、銀の瞳。これが雪女の姿、なのだろうか。
ちなみに胸は小さく……いや、まな板のように薄くなっていた。
さつきまでの豊かさを失つたことで生まれた差分により、和服の隙間からあまり抑揚のない白肌が見えた。

（ つて、僕は何を見ているんだ。ダメだダメだ）
すぐさま胸元から視線を外し、彼女の顔を見る。
すつと、彼女は無言で腕を伸ばした。

雪音の手は凜の肩へと触れる。柔らかく、しかし冷たい感触が伝わってきた。

そして、ぐつとその手に力がこもる。

「

よく聞き取れない小さな声で呪文のような言葉をつぶやき、
「う、うわあっ！」

突如、異変が起き、凜は思わず驚きの声をあげた。
自分の肩に、まるでサンゴのような形の、太く刺々しい氷の塊が生えていた。さらにそこを起点に氷の面積は拡大していき、凜の腕を覆つていいく。

「う、うわああ！」

一気に左腕の熱、感覚、自由が奪われていく。ひりひりと焼けるような痛みが走る。恐怖が脳裏を掠め……

「はつはつはつ！ 思つた通りの反応をするのだなあ、そなたは。わかりやすいやつだ！」

透き通った雪音の笑い声が部屋に響いた。

肩に出現した氷は粉々に砕けて畳の上に落ちていく。腕の氷もぱらぱらと剥がれていった。思わず自分の腕に触れて確認してみた凛だつたが、とくに凍傷のようなことにはなつていないようだ。

「び、びっくりしました……」

気づいたときには、彼女の姿は黒髪、茶色の瞳、豊満な胸、と彼女いわく一般的な人間の姿に戻っていた。

「雪女らしいことをしてみたぞ。どうだ。凍り付けなんてわかりやすいことこの上ないであろう！」

「は、はい……」

雪女といつよりは魔法使いのような印象を受ける手荒い証明だつたが、ここまで超常現象を見せられて首を横に振るわけにもいかなかつた。

完全に信じ切るとまではいかなくとも、しかし疑う必要もないと結論した。

「と、ところどころで……どうして、あんなに疲れきつていたんですか？ 本当にお腹がすいていただけなんですか？」

いちおうの納得をした凛は、次に交差点でのことを問う。あのとき雪音は非常に衰弱していた。それこそ死んでしまうのではないかといつくらいに。彼女は空腹だつたと言つていたが、それにしては冷凍コロッケを平らげただけで、ずいぶん回復しそぎているような気がする。六個すべて食べたとはいえ。

きっと、実はもつと深い理由が

「腹が減つていただけだな」

なかつた。

「うちの場合、食べる量も然ることながら、それ以上に質が重要なのだ。この……」

雪音はテーブルの上に放り捨てられていた袋を見る。

「冷凍コロッケですか」

「そう！ 冷凍ころつけ。これは非常によい！ うちの身体にしつくりぴつたりの逸品だ！」

雪音は、空になった冷凍コロッケのパッケージを愛おしそうに見つめている。

「本来ならば、雪女は人間の男の精氣を吸う。精氣とは人間の生命力。それを吸うことで活動するための力を得るのだ。吸血鬼やサキユバスと似たようなものだな」

「男の人の精氣を吸つて、力にする……」

凛は伝承の雪女を思い出す。

伝承と一口に言つても種類は様々だが、たしかにその中には人間とくに男の生命力を吸つて奪うといつものもあつたなと心の中でうなずいた。

「精氣は目に見えるものではなく概念的なもの。人間のもつ生命力の根源、体力のようなものと思えばいい。

うちが男の精氣を吸つておれば……どのように道端で疲弊しきり、そなたに助けを請つようなこともなかつたのだがな……。しかし吸うためには、まず男を虜にしなければならない。虜にするというのは、男を誘惑し、魅了し、その果てに凍り付けにするということだ」

本当に伝承の雪女みたいだな、と凛は思った。

しかし、それならなぜ男である凛の精氣を吸わずに普通の食べ物を要求してきたのだろうと新たな疑問が浮かんでくる。

凛が思案する間も雪音は言葉を続ける。

「虜にすること自体は雪女にとつて造作もない。凍り付けにする能力は自然のこと、さらに誘惑するための姿勢や魅力も個人差はあるが皆持つておる。しかしながら……凍り付けにするにも、そして精氣を吸うにも……その……しなければならぬのだ」

雪音はとたんに顔を赤らめ、言いにくそうに言葉を詰まらせた。

「する……つて、何を、ですか？」 凛は先が気になり尋ねる。

「んう……。そ、その……せ、せ、せつ」

そして、意を決したように雪音は言った。

「接吻をしなければ、ならぬのだ……」

言いきつて、とたんに顔の赤さが増す。そつと顔を伏せた。

あまりの赤さに、雪女なら熱で溶けてしまつたりしないだろうかと心配になる。

「な、なるほど。男の人と、その……き、キスするのが、恥ずかしいんですね」

凛もそういうた単語は苦手だ。今まで縁がなかつたせいもあるだろう。しかし、雪音は、

「違う！ 恥ずかしいわけではない！」

力一杯に否定した。その語気の強さに、それが強がりなのかそれとも本当に別の理由があるのか判別しづらくなる。

「うちはな……。大つつつ嫌いなのだ！ 男という生き物がっ！」

剣道さながらの踏み込みの音をたてて、雪音はテーブルに片足を乗り上げた。そして握り拳に力を込める。

「うちは、そなたら人間で言えば十歳ほどの頃に初めて人里へ下りた。人間の精氣を吸う練習をするためにな。しかし、うちが目を付けた人間の男は……うちに誘惑されたあと、こともあります……全裸になつたのだ！ うちが接吻をためらつてしまい、凍り付けにされるのが遅れたせいで動く隙をとえてしまつたのだ。成人している男が……相手が雪女とはいえ、誘惑されているとはいえ……！ まだ十歳ほどの少女にむかつてだぞ！ ああー信じられぬ！ 思い出し�ただけで腹が立つ！ もちろんうちはそんな者の精氣など吸わなかつた。うちはな、そのときに決めたのだ。こんな汚らわしい生き物の精氣など絶対に吸わんとなあ！」

「な、なるほど……」

一気にまくし立てるよつて言つ雪音の、ある意味凛々しい姿は圧巻だった。

「うちは男が大つ嫌いなのだ。接吻どころか近寄りたくもない。そのために精氣を吸わずとも食糧から力を汲み取り、精氣へ練成でき

るよう必死に修行した。だからこの冷凍ころつけでも充分な精氣を得られるのだ。ま、この食材は精氣を補つて余りあるほどの活力に満ちておるがな」

言い終えると彼女は満足したのか、テーブルから足を下ろす。そして凛の前に腰を下ろすと胡坐あぐりをかいた。スリットがついているため和服でも胡坐になれるのだが、片足が完全に露出しており目のやり場に困つてしまつ。

「なるほど……そつだつたんですか」

なんとかその美脚から意識をそらし、雪音の目を見て答えた。

しかし雪音の説明はきちんと理解した。

雪女は活動するためのエネルギー源として、人間の男から精氣を吸わなければならぬ。だが雪音は過去のトラウマによつて男を嫌つてゐる。だから精氣を吸いたくない。しかしそれでは力を消耗していく一方になり……そうして衰弱してしまつた状態の雪音を凛が見つけたというわけだらう。

男の精氣を吸うかわりとして食糧から精氣を得る方法を獲得していたようだが、自分の暮らす雪山でならともかく、人里ではその食料自体を得られなかつたのだらう。

（僕の精氣を吸わなかつたのも、僕が男だからか……。さつきの違和感はこれかな。あれ？ でも、待てよ……なにか、おかしい）

凛は、雪音の言葉を思い出す。そこにまた、引っかかるものを感じ、その原因を思案する。

と、一呼吸置いて冷静になつたのか、雪音は自分の胸に手を当て、落ち着いた口調で続きを話し始めた。

「数十年前 五十年ほど前だつたか にちよいとした用があつて人里を訪れたのだがな。そのときに、うちに名を与えた男に出会つた。まあ、接吻などしてやるわけもなく、ただ単に口を聞いてやつただけだ。色々と事情があつたからな。それが唯一の例外で他の人間の男とは会話すらしておらぬ」

（雪音さんに名前を付けたつていう人が、男性だつたから……じや

ない。引っかかったのはそこじゃなくて、もつと根本的な……）

凛は、雪音の言葉を聞きつつ、引っかかっている何かについて考
える。何か腑に落ちない。符号が合わない。

「とにかく。そんなわけで、三日ほど前に人里から降りてきたはい
いが、男の精氣など吸いたくなかったちは、人里に下りても力の
補給ができず、食糧もなかなか手に入らず、衰弱した。人里にいる
間は人間の姿をしていた方が良いということくらい、うちも理解し
てある。

しかし、それが力の消費を速めてな。人間の姿を維持するのにも
力を使うのだ。そして、人間の姿になる力さえ使い果たし、雪女の
姿へと戻り、倒れるか倒れないかの瀬戸際に陥つたところでそなた
を見つけたというわけだ。うむ 感謝しておるぞ」

助かったことへの安堵を漏らす雪音は自分の喉元に持つていった
手をふわふわと動かす。

雪音と話せば話すほど、違和感は大きくなつていく。答えは喉元
辺りまで出かかっているのに出ないような、そんなもどかしい気持
ちになる。 のだが、その前に。

凛はたつた今日について雪音の行為の方がどうにも気になり、尋
ねた。

「あの、さつきから何しているんですか

「ん。なにして」

雪音はさつきから、人間の姿になつた際に大きくなつた自分の胸
を和服のうえから揉んでいた。

最初はただ手を置いたり撫でたりしているだけだったが、今は明
らかに揉んでいる。しつかりと、その弾力を味わうように。純白の
和服の上からあてられた綺麗な手が、自由気ままに胸のうえで舞つ
ている。

「よいではないか。うちはな……実のところ、それなりには……
かわいい顔をしておるかな……なんて自負しているのだが」

また頬を赤らめ、戸惑い気味な、あどけない少女のような口調で

雪音は言った。

「ひとつだけ……その、劣等意識を持っているものがある。あまり人には言いたくないのだが、そなたは命の恩人だし……それに」

雪音は、なぜか凛の胸元に数秒視線を注ぎ、「うむ……うちの気持をわかつてくれそうだから言つが……う、うちは……じ、自分の胸がペったんこなことを気にしておるのだ……だから、人間の姿になつたときくらい胸を大きくしたいし、それを触つて感触を味わいたいのだ。この気持ち、そなたもわかるでるう?」

「……え?」

雪音の言つていることがうまく飲み込めない。気持は推察するがしかし……。

「よかつたよ。あそこに立つておつたのが、うちの大嫌いな汚らわしい男でなかつたうえに、うちと同じく、胸の起伏の乏しい少女で恥ずかしそうに雪音は白状する。だが同意を求められても自分は女性ではない。共感できるかと言われても……と、困惑する。困惑して……。

（……あ、ああ……あーつー）

凛は今までの雪音の行動、言動、そして今の台詞で、感じていた違和の正体に気がついた。

（雪音さん……僕のことを女人だと思つてるー）

彼女の一連の言動、行動、そのすべては、凛が女性だと前提されてのものなのだ。男である凛が違和感を覚えるのは当然だった。（でも、なんで僕を女人だと……？）

確かに自分は女顔だが、ここまで誤解されてしまつほどなのだろうか……と考え、しかしその疑問の雲は一秒で散つた。

（原因はこれが……）

凛は、未だに女子制服姿のままだつた。

男女による制服の違いを雪音が知つておるかは定かではないが、様子から察するにおそらく知つておるのだろう。

さりに前髪はピンクのヘアピンで留め、本来男性であるため胸の起伏こそはないものの、スカートからは雪音ほどではないが細く長い綺麗な足が伸びている。

凛はとても可愛らしい女子高生と呼称して差し支えない姿だった。雪女という異質な存在の登場に、凛はそのことをすっかり失念していた。

そして、そのことに気づいた今、さらに新たな疑問が生まれる。
(……もしも、僕が男だつて知つたら……)

雪音は凛が女だということを前提に話をしている。食料を与えた命の恩人ということもあるだろうが、それ以上に、凛を女だと思っているからこそ、ここまで心を開いて色々と話してくれたに違ない。

そのうえ雪音は男が大嫌いだと宣言している。曰く「大っつつ嫌いなのだ」である。凛が実は男であるとバレたら一体どうなるとか……。

まさか魅魚の悪趣味がこんな形で影響を及ぼしていくなんて……と、凛は自分の悲運を恨めしく思つた。

「んう……？ どうした、浮かない顔をして」
「い、いえ……あの、雪音さん」

「なんだ」

「もし、ですよ。もし、男の人があなたに近づこうとして、女人に変装して接触を図つたりしたら……どうしますか」

「殺す」

恐る恐るの凛の質問を雪音は即座に切つて落とした。その間は「ンマ何秒の世界。雪音の男嫌いは相当のものらしい。

たしかに、雪音の過去の一件を聞く限り、そうなつてしまつ気持はわからぬもないが。

「男であるうえに女に化けて接近を試みるなど変態の極地。断じて許せぬ。氷の槍で心臓を一突きにして殺してくれよう！ くあー許せぬ！ ああ想像しただけでなんだか胸の奥底で怒りが沸々と……」

雪音の美麗な顔立ちが怒りに歪む。ふと見ると両の拳は固く握られていた。

「しかし、何故そなたがそんなことを聞くのだ？」

「えつ……いや、その、あの、べつに」

突如、矛先が自分に向けられ凛は困惑の色を隠せない。とつさに両手を上下に振つてごまかしてみるが焦りは加速する一方だ。

「んう……？　ま、まさかそなた！」

はつとして凛の目を見つめた。

気づかれてしまつたか、万事休すか。凛は力一杯に目を閉じ、死を覚悟する。

「わひいっ！」

猛然と肩を掴まれた。そこにはかなりの力がこもつてゐる。僅かな身動きさえとれそうにない。死……。

「そなた……女装男に言い寄られておるのか！」

雪音はまつたく逆方向に誤解していた。

「くうう許せぬ！　わかつた、そやつに恼まされておるのだろう？」

だが安心しる。うちがいるからにはもう大丈夫。そのような男が現れたなら巨大ツララで身体をひと突きに……！」

「い、いえ、そういうわけではないですからっ！」

「んう……そうなのか？　まあ、それならよいが……」

暴走気味の雪音だつたが、どうやら凛を心配してくれていたようだ。

凛が実は男だといつてもバレていない。これほど自分のことを気にかけてくれる相手に対し、騙しているようで申し訳ない気持ちはあつたが、悪意があつて女に扮していたわけではないのだ。これは事故のようなものだと自分に言い聞かせることにした。

あとは、いつ雪音に帰つてもうつか、切り出すタイミングを見計らつのみである。

空腹を満たすことができたのだから、当然、雪音は「こを出でいくはずだ。

雪音は「」を出していく……はずだったのだが。

「さて、なんだか眠くなつてきた」

雪音は限りなく自然な動きで畳へ横になつた。そこで寝るのが当然のように。

凛はきょとんとした顔になりながら尋ねる。

「も、もしかして、「」に泊るつもりですか？」

「そうだが……なんだ？……まさか、うちが「」にいるのが嫌か

つ？ 嫌のかつ？」

跳ねるように起き上がると、なんとも悲しそうな潤んだ瞳で訴えかけてきた。

半分ふざけているのだろうが、そつ言われてしまつては断れるわけがないことをわかつて言つていそうなあたり性質が悪い。

しかし雪音が「雪女は群れて生活しない」と言つていたことを凛は思い出す。そこから推察すると雪音も凛と同様ひとりなのかもしれない。

「どこから寂しさを感じさせる雪音の顔を見てしまつと、孤独と

いうものに対しても敏感な凛が、彼女を放つておけるわけもなかつた。雪音に對してある種の共通点を感じたのかもしれない。

「嫌なわけないです。どうぞ、泊まつていってください。布団もお貸ししますから」

「そつか、なら安心だ。そなたは良い嫁になれる。しかし布団はいらない。あれは暑くなるだけだ。厚意だけ受け取つておいで。うちはここに直に寝る。布団より畳の方が涼しいのではな」

「そう言つて雪音は再び横になつた。

凛は、田を閉じた彼女の顔をちらりと見る。

とても穏やかな、優しい寝顔だつた。

(……雪女、か……)

多大な魅力で男を誘惑し、虜にして精氣を奪う雪の妖怪……と凛は想像する。

(たしかにこれだけ美人なら、男の人はあつさり虜になっちゃうぞうだ……)

事実、凛自身も話しているときは雪音にジドキドキさせられっぱなしだった。

容姿だけでなく、彼女の言動や行動、その性格にも、本能レベルで心を揺さぶつてくるような魔的な魅力を感じていた。もちろんそれは彼女が雪女として男を誘惑するために備えている容姿や能力に大きく影響されているものであつて、凛の抱いている気持ちが恋愛感情の類のものかと問われれば違うのだろうが……。

さて。凛は気持ちを入れ替え、当面の問題について考える。すなわち、雪音が凛のことを女だと思つてしまつてことについて考へる。

男嫌いな彼女のためにも、自分の身の安全のためにも、本当のことは言わない方が良いだろう。雪音の前では女を演じる他ない。

このまま住み着いてしまいそうな感さえある雪音には、頭を悩まされそうだ。

(もしかしたら、魅魚に助けを借りる必要もあるかもしれない……。うう、ぜつたい面白がつてからかうんだりうなあ)

すでに悩みは一倍三倍へと膨れていた。

「暑い……」

ふと、雪音が顔を上げて小さく呟いた。

「え、暑いですか？」

「うむ……」

彼女はゆっくり身体を起し、

「暑くて溶けそうだ。なんとかならぬか」
氣だるそうに問いかけてくる。

ここにこのところ寒い日が続いているため、凛にしてみれば暑いとは

思わないというのが正直な感想だが、雪音は雪女だからこれでもまだ暑いのかもしれない。和服を着ているのだから尚更だろ？

かといって着替えればいい、とも言えない。代わりに着せる服などないからだ。男物の服を渡してしまえば、それをきっかけに正体に気づかれる可能性も否定はできない。言ひまでもないが服を着なければいいなどというのは論外である。

凛はテーブルの上に置かれたリモコンを手に取る。

「それじゃエアコンをつけますね」

「えあこん、とな？ それはなんだ」

「エアコンを知らないらしい。」

「部屋の温度を調節する機械です。すぐ涼しくなりますよ」

説明しつつ、リモコンのスイッチを押した。ゆっくりとフーフラップが開き、吹き出し口が露出する。

ぱぱなくして、空気の出でぐる低くべぐもつた音が部屋に響き始めた。

寒い日が続いているとはいえ、部屋の中であれば肌寒いという程度で（……なのに外では雪……？）冷房を使えば部屋の温度はまだ多少は下がりそうだつた。凛にとつては寒くてしようがないが、雪音のためである。本当に溶けられては堪らない。

「おお。風が来たぞ！ これは凄いなあ！ 普通の人間でもこのようないい術を起こしてしまうからくりとは興味深い……」

「気に入ってくれたようで良かったです」

夜中に自動で電源が切れるようにタイマーをセットする。せつかくなので雪音にもエアコンの使い方を教えておくことにする。

説明を受けながらひとしきり感動した雪音は、やがて横になり、再び眠りについた。

部屋はだいぶ涼しくなつていた……いや、凛にとつてはやはり寒いというのが正直なところだ。凛も暑いのは苦手だが、さすがは雪女、それ以上に暑がりらしく。

（これだけ寒いのにまだ暑いなんて雪女らしいや）

凛は再び雪音の寝顔を見る。

（とにかく、僕も寝よう。……と、その前に風呂に入らなきゃ）

凛は部屋の電気を消すとバスルームへ向かつ。

寝起きは男物のジャージしか持っていないので、風呂から上がりても女子制服を着るしかなかつた。

震え上がるような寒さによって、凜は眠りから覚めた。

カーテンの隙間からは微かに太陽の光が差し込んでいた。朝方時計を見たところ六時半過ぎである。

夏の朝というには寒すぎる いくら異常気象といえど 屋の状態を不穏に思つた。この寒さは度が過ぎている。

女子制服を着ていてるせいか、特に下肢は冷えきつていた。

「ううん……」

寒さに耐えられず、凜はかけていた毛布を取り払い、身体を起こした。

立ち上がり、冷やかな空気が全身にスカートを履いているため空気に直に触れている下肢には一層 まとわりつき体温を奪う。やはり部屋が異常に寒い。

「どうしてだるづ」と呟き、しかしすぐに答えは出た。

天井の片隅を見上げる。

昨晩から今もなお稼働し続けているエアコン。

そこから吹き込まれる風が、非常に冷たい。涼しいでは済まない温度だ。

「もしかして……」

凜はエアコンのリモコンを探す。

昨晩、確かにテーブルに置いておいたはずのリモコン。それは現在、気持ちよさそうな寝顔を浮かべて畳に横になつている雪苗の手中にあつた。

何故そんな所にあるのだるづと思いつつ、雪苗を起しきなによつ静かにリモコンを抜き取る。

リモコンの表示を確認してみると、

「お、温度低すぎるよ……」

現在の設定温度は、このエアコンで設定できる温度の限界まで下げられていた。もちろん凛がつけたときはもう少し高めの温度に設定していたはずである。

もちろん、凛が夜中に設定を変更したということはない。となれば、設定をいじったであろう人物は一人しかいない。

凛は幸せそうに静かな寝息を立てている雪女を見た。

眠っているため術を使つていないのでどう。髪の色は銀に戻つていた。ちなみに、胸の膨らみも控え目以下になつていて、「ん、んうー……」

雪音が目を覚ました。

まだ眠そうな顔で、目を擦りながら身体を起しす。背中を反らし片腕を上げると「うー……」と伸びをする。そして「ふわあ」とあくびをした。

ぼんやりとした顔で部屋を眺め、凛の姿を見つけると、

「なんだ、もう起きておったのか」

「なんだ、じゃないですか。なんなんですか、これー」

「なにって……ああ、この部屋のことか？　どうだ、快適であろうう！　過ぎ」じやすいだらうー。夜中、暑くてまた目が醒めてしまつてな。どうやら、えあこんが停止してしまつていたらしい。そこで、就寝中のそなたの代わりに、うちが起動してやつたとこうわけだ。ついでに温度も出来る限り低くしておいてやつたぞ」

はじめてのおつかいを成功させた子どものような笑顔で雪音は胸を張つた。いつのまにか黒髪の人間の姿に変身しており、その胸も自信と体積に溢れている。

凛は温度を下げるボタンを連打する雪音の姿を思い浮かべて溜め息を吐きつつ、エアコンの電源を切つた。

「むう。止めてしまうのか。せっかく快適だったのに」

「エアコンを使うにもお金がかかるので我慢してください」

「世の中、金か」

「それとはちよつと違いますけど……」

凛は雪音に「ヒアロンを使うなら温度を下げるにこよにしてください」 と頼んだ。気弱な凛の性格上、注意ではなくお願ひになってしまったが。

「うむ！ 善処しよう！」

善処と言われると心許ないが、一応の理解をしてくれたようなので結果的には良しである。

「ああ、もうこんな時間か」

凛が再び時計を見ると、時刻は七時になろうかといつ頃合いだつた。

アパートから学校まではそう遠くないため授業に遅刻する問題は無いが、今日は剣道部の朝練がある。

「そりそり出ないと……」

通学用の鞄を手にとる。

「それじゃ、学校に行つてきますから、できるだけおとなしくしていてくださいね」

「」に居座ると宣言された以上、雪女である雪音を相手に無理に追いつける力も凛にはないし、そもそもそんな事をするつもりもない。となれば雪音には凛がいない間、問題を起こさないよう気に付けてもらつしかない。

「んむ。善処するぞ。ところで、学校とは何だ？」

「えつと、勉強したり運動したりするところです」

「ひとりでか？」

「いえ、友達もいますし、勉強は先生が教えてくれます」

「ほつ……」

大雑把に理解したのか、雪音は「わかった。留守は任せろ」とだけ言つと、再び畳に横になつた。その瞬間、僅かに見えた雪音の顔が、どこか思案気であつたのが少々気になつたが、

「あと、冷凍庫の中にコロッケがありますから、お腹が空いたらそれを食べてください。」の部屋を出ですぐにある白くて大きい箱の上の段です」

凛は台所にある冷蔵庫を指しながら説明した。

「了解した」

「それじゃ、行つてきますね」

「つむ。達者でなあ」

雪音の声に送られ、凛はアパートを出ようとする。玄関を出ようと

として

「そうだ。あれを持つていかないと」

ドアノブに手をかけた体勢から反転、踵を返す。

「どうかしたのか？」

「いえ、ちょっと忘れ物をしただけです」

部屋に戻った凛は雪音の問いに簡単に答えつつ、昨晩寝る前にとあるものを入れておいたリュックを手に取った。そして、改めてアパートを出た。

「行つてきます」

凛がアパートを出た数分後のことである。
雪音は畳に横たえていた身体を起こした。

今は誰もいないので術を解き雪女の姿へ戻っている。

「やはりこの方が楽だ。凛にも早く慣れてもらいたいものなのだが

……

独り「」ち、雪女の姿を恐怖する凛のことを思い出す。

と、そのとおり。

「うつ……」

ぐうぐうと腹が鳴った。

聞いている者がいなくて恥かつたと安心じつつ、

「んむ。腹が減ったな」

咳き、腰を上げる。

「それに……。今までほどではないが、それでもやや畳に」
テーブルの上に置いてあるワイヤーモンを手に取った。

そして、電源を入れようとして、

「……やめておくか」

今朝、冷房を効かせすぎてしまつたせいで、凛が迷惑していたことを思い出す。

温度を下げるだけはエアコンを使つてもいいと言われたものの、なんとなく後ろめたい気持ちがあつたのでやめておいた。雪音にもそれなりの良心と良識はある。

「よし。朝飯にしよう」

ただし、正式に許可されたことに関しては遠慮するつもりはない。雪音は台所へ向かい、凛の言つていた大きな白い箱、冷蔵庫の前に立つ。

「上の段と言つていたな」

上段が冷凍、下段が冷蔵である。

雪音は取手を掴み、扉を開いた。

心地よい冷気が漏れ、顔を包み込む。

「おお！ なんと気持ちの良い箱なのだ！ 凜のやつ…… いろんなものがあるのなら、もっと早く教えてくれれば良いものを」

ぶつくさと言いながら冷凍室の中を漁る。

雪音は字が読めないため、昨日見たものと同じ絵柄の袋を探すことになった。

「んむ。これだな」

見事に昨日の物と同じ冷凍コロッケを探し当て取り出すと、勢いよく冷凍室の扉を閉めた。

早速袋を開け始める。

昨日と同様、粗雑な開け方だ。破り捨てた袋は、床に落としたまま放置である。

そして未解凍のコロッケにそのままかぶりついた。

「つむ……んむ……美味だ。霜や氷の粒が混ざった独特の食感がたまらぬ。氷菓のよつでありながら主食としての役割も満たす。何と素晴らしい料理である！」

誰がいるわけでもないのに、食べた感想を述べていく。

幸せそうに満面の笑みを浮かべ、雪音は次々にコロッケを口へと運んでいく。

あつといつ間に全て食べ終えてしまった。

「他にも……色々な袋があるのだな」

再び扉を開けると、なんとも気が早いことに昼飯のことを考え始めるが、

「よくわからぬ……まあ、そのときの気分で決めるよ！」
じっくり見たところで、どれがどんな食べ物だかわからないのだから結局は袋の絵で決めるしかない。後でいいかと考えるのをやめる。

「それよりも、箱の下段が気になる」

雪音は視線を下げた。そこは冷蔵室である。

冷凍室よりも冷蔵室のほうが大きい。となれば、下の段にはもつと良いものが入っているのでは……と雪音は考えたのだ。

雪音は、わくわくしながら冷蔵室の扉へ手をかける。そして思い切って開いた。

「つーむー……」

冷凍室ほどではないが、涼しい空気が漂つてくる。それには満足した雪音だが、肝心の中身にはあまり興味を示していないようだ。不満げに口を尖らせている。

というのも冷蔵室の中にはペットボトルが數本とアボカドが一つしか入つていなかつたのだから当然ではあつた（もちろん雪音はそれらの名称を知らない）。

試しにペットボトルを一本手に取つてみたが、雪音にひとつては液体の入つた軟質なビン程度の認識である。しかも開け方がわからぬいので飲みようがない。

「引っ張つても蓋ふたが取れぬ。……叩き割るか」

一瞬、荒技に出ようかとも思つたが、その場合中身が飛び散つてしまつだらう。それでは飲めたものじゃない。

さすがの雪音にも常識はある。諦め、ペットボトルを床に置いた。そしてまた別の「ことく考え方を移す。

「この大きさなら……」

雪音はがらんとした冷蔵室を見つめる。にやりと顔を歪ませた。

凛は学校へと向かっている。

外は相変わらずの寒さだった。昨日からずっと雪がちらついていたため、今日はこれまで一番の冷え込みになるだろうと予測できる。雪の降る勢いはまだ弱いものの、それでも路上にはうっすらと雪の層ができ始めていた。

今まで上着を羽織れば寒さを凌げていたのだが、今日はそれでも身体が震える。

七月初旬、夏の町に雪が降るというのは異常でしかない。しかしそれはそれで面白いかもしないと凛は思い始めていた。雪女に出会つて少し見方が変わったのだろうか。

「これでも雪音さんは暑いのかな。さすがに雪が降つていれば暑いなんてことはないと思うんだけど」

凛は通学路を進みつつ、昨日から住み着いた居候のことを考える。昨晩は「暑かった」と言つていた。そのせいで、最低温度まで下がた冷房によつて凍えさせられることになつてしまつたわけだが。今日ははどうだらうか。

雪が降り始めてから一日も経てば、昨晩とは比較にならないほど寒くなりそうだ。できればエアコンの使用は避けたい。もしも今日も最低温の冷房をかけられれば、さすがに耐えられない。

「いや、夜にはもうエアコンをかけても意味がないくらい寒くなつている可能性もあるか……」

凛は曇天を見上げる。

「どうか、この異常気象……雪音さんが起こしていたりして……」

昨日、雪音が雪 実際には氷だったが を操る術を披露した様子を思い出す。

雪女に抱くイメージとしては、天候を冬のよつて変えてしまつて

らに造作もないのでは、と思つたりもある。

「…………さすがに寒すぎるなあ…………」

昨日雪苗と出会つた交差点に差し掛かつたところでもうよつてビ信号

待ちになり立ち止まる。

自分の身体を抱くようにして擦った。

アパートでは着替えるチャンスが無かつたため、コートを着ているものの中は女子制服である。そのため足が非常に冷え、そこから全身の体温が寒さに浸食されていくような感覚がせり上がってくる。

「恥ずかしいけど、もう少しの辛抱だ」

寒さは厳しいが、自分が男であると雪音に語られないためだと聞かせる。

わざわざ「田中」の姿で過「」すつもつなど毛頭ない。

リュックの中には着替えとして男子制服を入れてある。さすがに路上で着替えるわけにはいかないので、人目に付かない場所 ここから最も近いのは公園のトイレ についたらさつさと着替えるつもりだ。

信号が青になつた。凜は交差点を渡る。
渡り終えたところで、

神谷魅魚と遭遇した。もとい、してしまった。

めのつぶつぶ

を開始した。

長い丈のコートを着ていても、スカートから伸びた凛の素足は丸見えだ。女子制服を着て登校しているのは、誰の目にも明らかだつ

た。

（うー……この時間ならそれほど人には会わないと思ったのに……）
よりもよつて最悪の相手に遭遇してしまった。

「これから女装生活をするはめになりそうで魅魚に助けを請おうとは思つていたが、まさに現在進行形で女装している今このタイミングで会いたくなかった。

なんとか誤魔化そうと適当な話題を振つてみる。

「や、やあ。おはよう。魅魚つて、いつもこんなに朝早いの？」

「とひとひ田覚めてしまつたのね。ふふ」

魅魚は悪魔の微笑を浮かべ、独り言のよひに呟いた。凜の問い合わせなどまるで始めから無かつたかのように会話は成立していない。させる気もなさそうだ。

そして、なぜかペコリと軽くお辞儀をして魅魚は先へ行つてしまふ。

「ちよ、ちよつと待つて！」

確かに会いたくなかった。しかし会つてしまつた以上、去られるのは非常に困る。

間違いなく誤解されている。なんとかそれを解こうと魅魚を追いかけ横に立ち、並んで歩くことに成功する。

「あら。一緒に登校したいのかしら。いいわよ。あなたは大事な才トコノコの友達だから」

妙な強調をしながら言い、静かに笑う。

細めた目は一見虚ろに見えるがその奥底では妖しく光つており、凜には魅魚が本物の悪魔に見えた。

「これは誤解なんだ。これには、その、事情があつて……」

なんとか説明しようとするが困惑してしまつて上手くできない。

そのうえ口に関しては魅魚の方が達者なため、何を言つても軽くいなされてしまう。

まずは落ち着かなければ話にならない。

凜は冷静さを取り戻すことに専念しようとする。

と、そのとき目的のものを発見した。いつの間にか公園の近くまでたどり着いていた。まずは公衆トイレで着替えるのが先決だ。

「ちょっと待つてて、絶対に待つてて！」

凛は両手を前に出し、ストップのジョスチャーをしてみせた後、公園へと駆けていく。

「……おもしろい子」

魅魚は凛に言われた通り、公園の入り口で立ち止まる。

凛は公園のトイレへ一回散に駆けこんだ。男子トイレだ。個室へ入り鍵をかけるとリュックから自分の制服 男子制服を取り出した。

急いでコートと女子制服を脱ぎ、男子制服の袖へ手を通す。肌をさらせば寒さに震えたが今はそんなことを気にしていられない。

ワイシャツのボタンを留めるのに時間を食つたが上着は学ランだ。とりあえず羽織つて後で歩きながら留めればいい。ズボンを履き、女子制服一式はリュックへしまつ。焦つていながらも、きちんと折り畳むあたりが凛らしい。最後にコートを羽織つて、変身完了だ。

軽く呼吸を乱しつつ、着替えを終えた凛は魅魚のもとへ駆け寄つた。

魅魚はちゃんと公園の入り口で待つていた。外に待たせていたため、肩や頭には雪がうつすら積もっている。

ほつと胸を撫で下ろす半面、雪の中待たせてしまったことを悪いと思いつつ、立ち止まつた凛は膝に手をついて息を整える。

「ごめん、待たせちゃつて」

「あら、普通の男の子に戻つてしまつたのね。残念だわ」

普段あまり感情を表にしない魅魚が珍しく哀しそうな顔をする。とはいえる芝居がかつたそれが凛をからかうためのものなのは明らかだが。

「さつさつも言つたけど誤解なんだよ。好きで女の子の制服を着ていたわけじゃないんだ」

「へえ。そう。とりあえず……立ち話もなんだから歩きながらこましょ。それに朝練だつてあるんでしよう」

「あ、そうだ……朝練があるんだつた。うん、行こう」

二人は、雪の降る道を歩き出した。

男子制服に着替えたので、もつ突きつけられる視線にうろたえる必要もない。

今度は落ち着いて、順序立てて説明しようと試みる。

「実は、その……昨日、具合を悪くした人を見かけて……。その人を助けたんだ」

さすがに腹ペコの雪女が……とも言えないでの漠然とした言い方でごまかす。それでも嘘はつかないところは凛の性格ゆえだろう。「それで、その人を僕のアパートで介抱して 今もまだアパートにいるんだけど その人、大の男嫌いなんだ。そのとき僕は女の子の格好をしていたから、その人は僕のことを女だと思っているんだけど……」

「本当は男だと言いだせなくて困っているのね」

状況を察したのか、魅魚が言葉を引き継いだ。

「那人、女人の人よね。わざわざ男嫌いっていうのだから」

「うん」凛は肯定する。

「若い人?」

「見た目は、僕より上だと思う……二十歳くらいに見えるかな」

五十年前にも人里へ来たなどと言つていたからには生きている年数はもっと長いのだろうが、見かけ上何歳に見えるか、で答えることにした。

「……そう」凛の返事に、魅魚は一瞬眉根を寄せた。

そして数秒の沈黙を置いて、話し始める。

「あなた……。人を助けるのはいいけれど、その方法が自宅に連れ込む……というのは、どうなのかしら」

片目だけ細めて凛を見た。芝居がかってはいるものの、まるで変態や犯罪者を見るかのような訝しげな眼差しだ。

「救急車を呼んだり、病院へ連れて行くのが普通だと思うのだけど。自宅に連れ込むなんて、あわよくば……なんてことを考えていそう

な人間の行動ね。まるで幸太郎のようよ」

貫いてくる視線は、周囲の気温よりも冷たい。

相手の衰弱の原因が空腹だつたため、食事を与えるのが一番の対処法かと思って自宅へ連れて行つたのだが、そのことを曖昧にただ「助けた」としか説明しなかつたのが仇となつた。

しかし、腹をすかせた女性が助けを求めてきたというのも間抜けな話である。

「ち、違うつてば！ その……病院へ連れていくほどじゃなかつたから、僕のとこへ呼んだだけで……」

結局、慌てふためきながら弁解することになつてしまつた凛を魅魚はいつも通りの邪氣のある笑顔で眺めていた。

「ふふつ ジョークよ。幸太郎ならともかく、あなたにそんなことをする勇気はないわ。といつても、そんな勇気はいらないけれど」からかわれていただけのよう安心した。

もともと魅魚は必要以上の詮索はしないタイプだ。凛の状況が把握できればそれでいいのだろう。逆を言えば、魅魚の方から積極的に何か尋ねてきた場合、彼女は何かを企んでいるということでもある。

いつのまにか校門までたどりついていた。

二人は校舎へ入り、上履きに履き替える。

「その女人の人、まだいるのよね。あなたのアパートに」

魅魚が下駄箱に靴を入れつつ尋ねた。魅魚の靴箱はやや高い位置にあるため、小柄な彼女は背伸びをして靴をしまう。

「うん。まだ当分の間いることになるかもしねり」

「そう。つまり、あなたはその間少なくとも自宅では女の子でなければならないのね」

魅魚は上履きに足を通すと、つま先で軽く地面を叩いた。

そして微笑。

それは魅魚が、凛にとつてよからぬことを田舎でいふときの悪魔の笑みである。

剣道部の朝練も、午前の授業もつつがなく終了し、昼休みになつた。

今後、凛は学校での男としての生活と、自宅での女としての生活の、言わば一重生活をしなければならない。そのことを考えると気が滅入る凛ではあったが、できるだけ普段通りにふるまつていた。いつも以上に寒いからだろうか。今日は教室で昼食をとつている生徒が多かつた。凛も幸太郎と一人、教室で昼食をとつている。購買でパンを買つてきたのだ。

そのうち魅魚も来るだろう。彼女は別のクラスの友達グループと一緒に昼食をとつているらしいのだが、教室に戻つてくるのはわりと早い。

唐突に、

「凛よ。オレはそろそろこの高校に、新しいランチスタイルを提唱しようと考えている」

凛と向かい合つよう前に前の席に腰掛けていた幸太郎が、重大発表をするような重々しい口調で言つた。

「現在！ 我が靈西高校でとられているランチスタイルにはどんなものがある！」

勢いよく立ち上がり、幸太郎は風を切るように右手を振つた。

その勇猛な熱のこもつた弁舌にたじろぎつつ凛は考える。

「ええと……購買、学食、あとはお弁当……くらいかな？ 学校の外には出られないし」

「その通りだ凛。では、メニューにはどんなものがある」

問いつつ、幸太郎は左手に持つた焼きそばパンを一口食べた。

「うーん。購買にはパンくらいかな。学食には麺とか定食もあるけど。持参のお弁当は人によるし……」

幸太郎の問いに答えつつ何の意図があるのか凜は考える。幸太郎のことだからくだらない結果にしかならないとは思うのだが、さつぱりわからない。

しかし考える必要は無いと言わんばかりに幸太郎はあつさりと提唱した。

「そう……この学校の昼食は普通すぎるのだ……この感受性豊かな思春期の我ら学生に、普通の昼食など健やかなる成長の抑制にしかならん！ ああ平凡！ ああ退屈！ いいか……必要なものは虚をつく意外性だ！」

よくわからない主張を展開しつつ、幸太郎は再び焼きそばパンにかぶりついた。さつきより動作が荒々しい。

「ずっとオレは考えていた。どうすればこの平穏かつ平凡な現状を打開できるのか。考えに考え……やつと、ある結論に辿り着いた。そのときオレは感じたよ。背筋に雷が落ちた！ ああ！ なぜ今まで気が付かなかつたのだろうか！ ヒントは至るところに堂々と提示されていたのに！ しかしそれに気がついたとき、全身をカタルシスが駆け巡った！」

「そんなにすごい考えが……？ それっていいたい……」

幸太郎の熱意と真剣さに凜も考えを改め、構え直す。

ふふん、と一拍おいて幸太郎は言った。

「キーワードは、女体研究と女子高生の昼下がりだ」

「え」

真面目な話なのかと思いまや、出てきたワードに凜の期待は瓦解する。

「結論！ オレは提唱する！ それは……すばり！ 昼食女体盛り法案だ！」

凜は心の中で、またか……と溜め息をついた。

それを代弁するかのように「また幸太郎がなんかほざいているわよ……」「変態すぎるわ……」「あいつと同じ空気を吸つていて嫌あ……」「淫獣もあそこまでいくと天然記念物ね」「やっぱ

り死ねばいいのに」と教室にいる生徒が多いぶん、いつも以上の非難の声が聞こえてくる。

(……僕、なんで幸太郎と友達なんだらう……)

そんな凛や周囲の人間たちの反応には脇目も振らず、幸太郎は校則の壁さえ飛び越えた法案の内容について説明を始める。

「この法案はその名の通り、昼食を文体盛りにするというものだ! こうすることにより男子生徒の健やかなる成長はぐんぐんと促進され……おつと、誰か来たようだ」

幸太郎が饒舌だつた語りを止めた。その視線の先には教室へと戻ってきた魅魚の姿があった。

「よし、論より証拠、百聞は一見に如かずだ。オレが実例を見せてやる」

幸太郎は自分の鞄を取り出し、中を漁りだした。

その間にもアボカドジュースのパックを吸いながら魅魚が向かってくる。

「また幸太郎が馬鹿をしているのね」

挨拶代わりにそう言うと、空いている凛の隣の席へ腰掛けた。

「今日の剣道部、放課後の練習は休みだそうよ。掲示板に書いてあつたわ」

戻つてくる途中に見てきたのだらう。なんだかんだで気の利く一面も持つている。

とその時、鞄から何やら取り出した幸太郎が魅魚に語りかけた。

「おう神谷。よく來たな、待つていたぞ!」

「あなたのためじやないわ」

冷ややかな声で魅魚は言い捨てる。

しかし、幸太郎もそれには慣れているようで、めげずに話を続ける。

「そう高慢かつ冷淡な態度をとるな。今日はな、神谷にプレゼントを用意してきたんだ」

ふふん、と意味深な笑みを浮かべつつ幸太郎が差し出した手には、

「ジッペパンがあった。

「…………」

魅魚はアボカドジュースを吸いながら、無言でただそれを眺めている。

それが何なのかと尋ねないあたり、よつぼど興味がないのだろう。しかしされさえ想定通りとでも言つよつて、幸太郎は勝手に解説を始める。

「これはな、神谷のためにオレがわざわざ早起きして作った特製アボカドパンだ！」

ぐいとパンを持った手を突き出す。魅魚の好物で釣る作戦のようだ。よく見るとその「ジッペパン」にはスライスしたアボカドが挟んであつた。

「さあー！」

突き出した手をさらに前方へと差し出す。

「さあー！ さあー！ さあー！」

魅魚の顔の前でアボガドパンを静止させた。食べろ、という意味だろう。

「うふふ。ありがと」

妖しくほほ笑むと、魅魚はパンを受け取る

「んぐおつー！」

と見せかけて、幸太郎の口へ押し込んだ。幸太郎は口を押さえて、打ち上げられた魚のように床を跳ねまわった。

「馬鹿ね。そのアボカド、全然熟していないわ。買ってすぐに使つたんでしょうけど、それだと固いし苦味があるし、美味しくないのよ。日本のお店で売っているアボカドは店頭では完熟していないから何日か放置した方がいいの。バナナみたいにね」

まさかスライスして挟まれたアボカドを見ただけで、熟している度合いがわかるとは……と、凜は魅魚のアボカド好きを恐ろしく思つた。

「うんぐあつー！ ぐおおー！ んぬういー！」

アボカドパンを口に含まされた幸太郎は、もがき苦しんでいた。

しかしアボカドの固さや苦味が原因にしては大げさだ。

全てを飲み込んだ 飲み込んでしまった幸太郎が、目を血走らせ必死の形相で叫ぶ。

「ぐはあつ！ 」「このパンには『神谷を眠らせ、その隙に女体盛りの舟にしてしまう大作戦』を実行するための促進剤と睡眠薬が仕込んであつたのに……！」

（……睡眠薬はともかく促進剤つて、いつたい何の……）

「説明お疲れ様」

魅魚の言葉を合図にするかのように幸太郎は痙攣したまま教室の床に倒れこんだ。

同時に昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴る。まるで試合終了のゴングのように。

ビクビクと全身を脈打たせているのだが大丈夫だろうか……。被害者が幸太郎でなければ大事件である。

教室からは魅魚を称え、幸太郎を罵倒するざわめきが溢れ出していた。「これで静かになつたわ！」「おめでとう魅魚ちゃん！」「やつと死んだのね！」拍手喝采だつた。

凛は幸太郎に近寄る。

「変なこと企むから……」

一人のいつものやり取りにも慣れきつており比較的冷静な凛は、うつぶせの幸太郎を仰向けにしてやつた。うつぶせのままというのは死体のようで不気味だったからだ。

保健室へ連れて行こうかとも思つたが完全に眠つていて（死んでない……よね？）連れて行きよつがないため、諦めて様子を見るに留める。幸太郎なら大丈夫だろつ。

魅魚はいつも通りの微笑を湛えながら幸太郎の状態を分析する。

「こんなに即効性の強い睡眠薬だなんて、どこで手に入れたのかしら。それとも一緒に入れたという促進剤が変な化学反応でも起こしたのかしら」

もう痙攣は治まり表情も見る限りでは安らかだ。安らかな眠りについてしまったとしたらそれはそれで問題だが、さすがにそれはないだろ？

「ところで。あなた、放課後は時間あるわよね
幸太郎には興味がなくなつたかのよつたな顔で、魅魚は凛の方を見た。

「うん。剣道部が休みになつたんなら、特に用事はないよ
魅魚が席を立つ。

「そう。それじゃ、放課後は買い物にいきましょ。あなたのお洋服を買いに」

妖しく目を光らせ、にやりと笑つた。

放課後。雪の積もった路上を歩く凛と魅魚。

自宅への帰路ではなくデパートへと向かう道のりである。

「ひとの経緯は「あなた、女装生活をするのはいいけれど部屋着はどうするつもり?」ずっと制服でいるわけにはいかないでしょう」

鮑魚に抱持する力がこの問題に起因する

男嫌いな雪音と生活をともにする以上、女装生活は避けられないが、そのための衣服が女子制服のみというのはさすがに無茶だ。

魅魚の趣味が『凛を女装させる』ことであるため、彼女の所持品

やら魅魚はこれを機に凛をあらぬ方向へと導いてしまいたいらしい。

だ。

「ついでしました……」

思わず、そんな言葉が漏れた。

現在『春田テパート』の入口前である。

このデパートは、凛の住む霞町で唯一の大きな建造物として有名である。それだけ客入りも多く、連日賑わっている。七階建てという規模を誇るこのデパートの周囲にはこれほど大きな建物は他にないため、少々存在が浮いてはいるが。

春日亭パートのひつぺんを見上げる凜だが、仕草はもじもじして
いて非常に情けない。

なぜ女々しい態度をとつてゐるかといえば、ここへ来る途中、公園に寄つて女子制服に着替えてきたためである。凛は今、女装をし

購入する洋服のサイズの都合上、「魅魚の服を買いに来たその付き

添い」という設定は通用しない。自分のものとして買うためには、やはり自分が女性として来店する必要がある。そういうた理由で女装をしてきたのだが、もつと他に良い方法はなかつただろうかと今になつて凛は後悔していた。

周囲の人間に自分が男だと気付かれていなか……非常に心配であり恥ずかしくもある。

「堂々としていないとかえつて疑われるわ。どこからどう見ても女の子だから安心なさい。ヒゲもまったく生えていないし、喉仏も目立たないし、完璧な女の子よ」

凛の情けない態度に魅魚が忠告を入れる。

しかしそうは言われてもスカートを履く感覚は簡単に慣れられるものでもない。膝を隠せる程度の長さはあるので、ミニスカートのような恥ずかしさこそ無いが、それでも風が吹けば妙な感じがする。やはり他の購入方法を検討したいと凛は思う。

「どうせ試着するときには着替えることになるのだから同じよ。諦めなさい」

凛の胸中を見透かしたように、魅魚が喝を入れた。

「それとも、そうね。人目につきたくないのなら……非常階段を使つて屋上から中に入る?」

魅魚が提案するように、

「ここでのデパート、外付けの非常階段を使えば、屋上でも好きな階でも、人目につかずに入れるのよ。とくに屋上は、一般客に開放されていない未知の空間だから、おすすめ。屋上の入口は施錠されているけれど、近くのフェンスをよじ登れば簡単に侵入できるわ。非常階段のことを知つている人自体少ないから他に人がいることも滅多にないし、こつそり屋上に忍び込んで……」

「なんだか目的が変わつているような……」

魅魚の顔によからぬ悪戯を考えているような微笑が浮かび、凛は慌てて話の方向を修正する。

「早く買って、早く帰ろう!」

「あら、行く気満々なのね。早く買いたいだなんて
「僕の希望はそっちじゃなくて帰る方……」

「さ、行きましょ」

からかわれ、赤面しながらも春日^{ヒコ}パートへと入っていく。

通常通りに入店し、婦人服売り場である三階で一人はエスカレーターを降りた。

婦人服専門店ではなく一般的なデパートなのが救いだ。凜の緊張も幾分やわらぐ。仮にここが専門店であれば、場違いなところにいるという凜の緊張、不安、羞恥は容易に臨界点を突破してしまったことだろう。

白を基調とした明るいフロアに婦人服が並び、所々に派手な服や装飾をさせたマネキンが立っている。

外観そのものは置いている商品が違うだけで男性の売り場と大して変わりはなかつた。

とある区画を除いて。

「あ、あう……」

凜はそこから田を逸らすが、魅魚にはあつさりと感づかれてしまう。

「あら、あとでそれも買つのよ。楽しみね」

問題の区画

下着売り場を一瞥して微笑した。赤面してしまつ

凜に構わず魅魚は歩を進めていく。

彼女の小さな背中を追いながら、

「そんな……さすがにそこまでしなくても」

見られるわけではないのだからいいじゃないかと言おうとして、しかし魅魚に遮られた。

「甘いわ。相手は女人の人でしょ。男を騙すのとはわけが違うの。ぼろが出れば一発でバレるわよ。完璧に女装したとしても心細いくらいだわ」

若者向けの洋服が置かれた区画で魅魚は立ち止まり、商品を田利きしていく。同時に凜との会話もこなす。

「最近は寒い日が続いていてよかつたわね。夏用の薄手の服だと線が浮いたり透けたりしちゃうでしょ。でも今の気温だつたら厚着でもおかしくないわ」

魅魚はハンガーに掛けられた服を一着ずつ両手に取り、それらと凛とを交互に眺めた。

季節は夏だが、ここ数週間は寒い日が続いているため、数は少ないものの秋冬物の服も置いてあった。魅魚の手にあるのもそれである。

「せ、線……」

ぼそりと呟いた凛に、魅魚が感情の読み取りにくい視線を注ぐ。

「あら。あなたでも幸太郎みたいな妄想をするのかしら。それとも正に今、しているのかしら。いけない子ね。ふふふ」

魅魚はわざと背中を見せるように後ろを向いた。薄手のスクールカーディガンを着ているので何か見えることはないのだが、それでも少しだきっとしてしまった。

さりに妖笑され、相対している凛の全身からは冷汗が噴き出してきた。

「ぜ、ぜんぜん。そんなことないよ……」

「ウソね」

さつと流し、魅魚は服を手に取つては戻し、次を取つてはまた戻すという作業を繰り返している。

凛に似合うかどうか品定めをしているようだ。凛の女装する目的がなんであろうと、魅魚の目的である『凛を女装させる』に趣旨が合致するため、服選びそのものは真剣である。

そしてようやく、魅魚の厳しい選考をぐぐり抜けた一着が凛の身体にあてがわれる。

「…………」

「ど、ど、ど、かな？」

服が似合っているかどうか。魅魚は無言で吟味しているため、良し悪しを凛の方から問い合わせてしまった。

魅魚は未だ無言。

そして、十数秒の沈黙が過ぎたところで。

「ダメね。印象が明るすぎるわ」

服を元の場所に戻し、再び選別を始めた。

真剣なその姿にやはり魅魚も女の子など凛は改めて思う。態度や表情からは感情を推測しにくいが、なんだかんだで楽しんでいるように見えた。

「これはどうかしら」

再び服をあてがつた。

そして、沈黙。

凛に似合つかどうかを吟味しているだけなのだろうが、じつと眺められるとどうも落ち着かない。魅魚の視線というのは、相手の心中まで見透かしてしまつような鋭さと力強さがあるからだ。

「まあまあね。それじゃ着てみて」

魅魚は凛に洋服を手渡すと、試着室の前へと先に向かつた。そして凛の方へと振り返る。

「さあ。来なさい。そして着なさい」

そのときカーテンの前に立つた魅魚が浮かべた表情は悪魔か女王様か、どちらかだろう。

凛は顔を真っ赤にしながら近寄つていぐ。

「き、着るの？ 着なきゃダメ？」

周囲を確認しながら小声で問う。

ざつと見た限り近くに客や店員はいないうだが、だからといって、おいそれと着替えられるほど凛の精神はタフではない。

「買う前に試着するのは当然でしょ」

魅魚はいつもの調子だ。

「それはそうだろうけど……」

「今、あなたは女の子よ」

渋る凛のスカートを、魅魚がぐいぐいと引っ張った。

「ちよ、ちよっとやめてっ」

慌ててスカートを手で抑えた。凛の顔は赤を通り越して真紅に染まっている。

「早くしなさい。他にも何着か買つのだから」

「う……うう……。わかったよ……」

凛は観念して、試着室の中へと入つていった。

落ち着いた雰囲気で統一した洋服を計三着、丈の長めのスカート一枚、そして……なぜか女性用下着を一組。

以上が今回の買い物で購入した品である。

代金はすべて魅魚が持ってくれた 曰く自分の趣味の延長なので代金は自分が持つ のだが、そのかわり所有権も魅魚にある。

今は魅魚が凛に一時的に貸しているという状態らしい。凛自身に女装の趣味があるわけではないため所有権など必要ないが。

アパートに帰る前に魅魚の家に寄り、今まで凛が女装するときに着ていた服も数着借りた。買い物という試練を乗り越えたご褒美だそうだ。

デパートへ行く前は「服は貸さない」と言っていた魅魚だが、それは買い物に行く必要性を主張するための方便であり、目的が果たされた今ならもう構わないらしい。

リュックの中身は一杯になっていた。実際の重量以上に重たく感じつつ（これは心労による重みかなあ……）凛はアパートのドアを開ける。

「だいぶ遅くなっちゃった」

服を借りるために魅魚の家に寄った時間はそれほどでもなかつたが、デパートで過ごした時間が長すぎた。魅魚は凛が予想していた以上に真剣に服を選んでいたため、かなりの時間を要したのだ。

時刻はすでに夜の九時を回っていた。

中に入り、ドアを閉め、靴を脱ぐと部屋へと向かう。

「雪音さん……。あれ？」

電気はつけ放し。部屋の戸も開け放しだった。

しかし部屋には誰もいない。

いつも自分が帰ってくるときと同じ光景。テーブルやタンス、本

棚など必要な家具があるだけの殺風景な部屋が待ち構えているだけだ。

「どこか行ったのかな……？」

なんとなく居そうな気がしてテーブルの下やカーテンの裏などを見てみるが、やはり雪音の姿はない。

雪音がいないことを不思議に思いながらも、凛は荷物を置き、リュックの中に詰めた女性物の衣類を取り出した。これらは雪音がいないうちにしまっておいた方が都合が良い。とりあえずタンスの空いている段の中へと入れておく。

「……雪音さん、どこに行つたんだろう

タンスを閉めながら、凛はおもむろに呟いた。

雪音が理由もなく出でていくとは思えなかつた。彼女には食料を手に入れる術がないからだ。

男性の精気を吸つて食料代わりにするのが通常の雪女の行動らしいが、雪音はそれをしない。かといって、飲食店やスーパーなどに入つて強引に食品を奪うなどといふこともしないだろう。となれば食料が確保できるのは凛のアパートだけなのだ。

「散歩にでも出かけたのかな……？」

ちょっと外が気になつて外出したといつ可能性ならあり得る。彼女は部屋が暑いと言つていたから、まだ雪の降つている外へ身体を冷ましに行つたのだとしてもおかしくはない。

とは言え、やはり心配だ。

雪女と自称するだけあつて不思議な術を使えるようなので、夜道で変質者と遭遇したとしても何とかなりそうだが……そう言つた理由を抜きにして、雪音のことが心配だつた。

「やつぱり探しに行つた方がいいかな」

このアパートの周辺をまわつてみよう、と凛は立ち上がる。

（……そうだ、懐中電灯を……）

夜道は暗い。街灯があるにはあるが、手持ちの明りがあるのに越したことはない。

凛は冷蔵庫の上に懐中電灯が置いてあることを思い出し、台所へ行く。

「あれ……？」

凛のアパートの間取りは、玄関を入つて右手がユニットバス、隣の個室にはトイレがあり、左手には台所、正面に向かえばハザード部屋が一室となつていて。最初部屋に入ったとき、台所は素通りしてしまつたので気付かなかつたのだが

「いつたい何が……？」

冷蔵庫の前は大変なことになつていて。

何者かに荒らされたようにペットボトルが散乱し、さらに冷蔵庫内を仕切るための中板まで放り出されている。魅魚専用のアボカドも同様の有様だつた。

空き巣でも入つたかのようだが、それにしても荒らしてはいるのは冷蔵庫だけだ。空き巣が狙うとしたらタンスや、もつと別の場所だろう。

それに冷蔵庫の扉は閉められてはいる。中をこれだけ荒らしておいて、扉だけ律義に閉めていくといふのも妙だ。

「どうしてこんなことに……？」

凛は冷蔵庫の扉に手をかけた。

そして、恐る恐る扉を開く。

普段なら気にならない程度の大音をしかねばはずの、ギィ……という音が不安を駆り立てる。

そして、中には。

「う、うわあああああ　！」

中には死体が入つていて。

密室のアパートで殺人事件が　？

思わず凛は叫び声をあげてしまつたが、

「あ」

いや、死体ではない。見間違いだ。

が、凛がそう思ったのも無理はない。

「……んう？」

冷蔵庫の中に、雪音が居た。

膝を抱えるように丸く座つて、ぴたりと冷蔵室内に収まっていた。

白の和服を着、その「ええ真っ白な肌の人間が冷蔵庫の中に入つていれば驚くのが普通だろう。自分が殺人事件の第一発見者になつてしまつたと誤解してもおかしくはない。

「なんだ、凛か……ふあ～」

さつきまで寝ていたのか、目を細めながら凛を見上げる。眠そうな目を擦りつつ、

「やつと帰つたか。うちは待ちくたびれて眠つてしまつたぞ」

雪音は一瞬目を閉じた。すうっと髪の色が銀から黒へと変わり、目を開いたときには瞳も茶色に変わっていた。同時に胸元に谷間が生まれる。雪音が言つといふの一般的な人間の姿だ。

「よい……しょつ。あつ、と

立ち上がるとするが、狭いところから動こうとしたためにバランスを崩した。何かに掴まろうにも、何もない。

雪音はそのまま前のめりに崩れていって

「ゆ、雪音さん、大丈夫でぐわあつ！」

凛を押し倒す格好で冷蔵庫から脱出した。

人間モードの雪音にしかないとわわな胸が和服越しに凛の顔面に押し付けられている。とても柔らかく心地よい。しかし呼吸ができるない。

「んむう……す、すまぬ。うちとしたことが

詫びつつ立ち上がり、凛に手を差し出す。

「どうしたのだ。掴まれ」

「は、はい……」

赤面しつつ雪音の手を取り、立ち上がる。

凛は自分の顔が沸騰する音を初めて聞いた気がした。

雪音の言によると、今朝、凛が学校へ出かけたあと何気なく冷蔵室を開けた雪音は「涼しそうだから」という至極単純な理由でそこに入つたらしい。中にあつたものは邪魔だつたので外に出したのだろう。

凛は散乱した中板やペットボトルを元の場所へと戻した。アボカド以外の食材がなかつたことを不幸中の幸いと思うと同時に、そういえば今日もまた買出しを忘れていたということに気がつく。

「デパートに行つたとき、ついでに買つておけばよかつたなあ。すっかり忘れてた」

婦人服売り場の件で頭がいっぽいでそこまで気が回らなかつた。失敗したなあなどと咳きつつ、凛は部屋へと戻つた。

「あれ。今日はエアコンつけてないんですね」

部屋ではすでに雪音がくつろいでいた。

「ぼーっとテレビを見ている。最初こそは「箱の中の人間がいるぞ！」と驚いていたが「あなたもさつきまで箱の中にいたじゃないですか。しかもぐっすり眠つっていたでしょう」と言うと「確かに。ならば普通のことだな」と納得してしまつた。もちろん、本当に箱の中に入がいるわけではないということは後から説明した。

凛の問いかけに、雪音はテレビを眺めたままこたえる。

「昨晚と違つて良い気温だからなあ。これなら、えあこんの助けを請う必要もないであらう」

テレビが気に入ったのかもしれない。ちなみに見ている番組は恋愛ドラマで、惹かれ合つ男女が互いを抱きしめるというシーンだつた。

「そうですね。よかつたです」

今夜は凍えなくて済みそつたと安心しつつ、凛は適当などいろ

に腰を下ろした。

せっかくなので一緒にテレビを見ることにした。といつてもこのドラマは見たことがなくストーリーもわからないため、途中から見て面白いかどうかは疑問だが。

「今、どんな展開なんですか？」

見ているところに声をかけるのも悪いかと思つたが、話の流れがわからないと見てもさほど面白くないので尋ねてみるとしたのだが、

「ん。わからん」

残念ながら答えは得られなかつた。

「うちはこの映像とやらに興味を惹かれたから見ておるだけだ。芝居の内容には興味ない。それに……男に惚れるなど、人間の女も随分と物好きなのだな」

凛の方を向いたかと思つと惡々しげな表情を見せた。

雪音の男嫌いは筋金入りだ。今、自分は『女』だから助かつてゐるということを凛は再認識し、気をつけなければ……と氣を引き締めた。

と、雪音が背を反らし、伸びをした。そして大切なことを思い出したかのように、

「おお、そうだ。風呂を貸してはくれぬか。山におつた頃は湖で身を清めていたのだが、人里に下りてきてからは、そんなものも無くてな。もう人里へ下りて何日か経つ。綺麗好きのうちとしては、さすがにもう我慢の限界なのだ」

そう言つて立ち上がりきょろきょろと首を動かす。凛も腰を上げた。

「いいですよ。場所はこっちです。玄関の近くの……」

歩いて行き、

「ここがお風呂です」

扉を開けて中を見せた。一畳分のスペースのコーシートバスである。

「脱衣所はないので服はこここの棚にでも置いてください。ちょっと

湯気で湿っちゃうかもしれませんけど」

凛は風呂場の壁の上方に取り付けられた棚を指さす。ちなみにバスタオルなどもそこに置いてある。

「湯気の心配ならいらぬ。うちは湯を使わぬからな」

たしかに熱さの苦手な雪音が、わざわざ熱い湯を使う理由もない。

「えっと、あとは……」

最後にシャワーの使い方を教えておく。水の出し方、シャワーとカラランの切り替え方など必要そうな操作を一通り教える。雪音はシャワーを見るのは初めてだつたようで感心しながらも、使い方はすぐ覚えたようだ。

「準備万端。では早速使わせてもらひついで。ふむ……そうだ。そなたも一緒に入るか？」

「なッ！」

その言葉に一瞬、時が止まった。

「い、いえ！ ぼ……じゃなくて、わ、私はあとで入りますからー！」

危うく僕と言つてしまつところだつたのを堪えて申し出を断る。自分のことを僕と呼称する女子もいなくなはないが、できるだけ疑われる因子は排除した方が無難だ。

「そうか」

雪音は不満そうな顔で、

「うむ。まあ、よく考えてみれば、二人で入るにはちと狭いな。くつつけば入れなくもなさそうだが……まあ無理に一緒に入る必要もない」

「くつつく……！ だ、だだだ、ダメです！ それじゃ、わ、

私は夕飯の用意しておきますからー。」

「くつつく……！」

雪音が風呂に入つてゐるうちに、遅くなつてしまつたが夕飯を作つておこつと凛は台所に立つた。

冷凍室を開けて中身を確認する。冷凍コロッケがあればそれを出そうかと思つてゐたが、どうやら品切れらしい。あるいは鳥のから揚げとピザ どちらも冷凍食品である くらいだつた。

雪音は解凍していらない冷凍食品ならなんでも好んで食べそうだ。そう考へて、食べやすそうながら揚げを選ぶ。自分のぶんも同様にから揚げにすることにした。もちろん自分の物に関してはレンジで解凍するが。

「明日こわはぢやんと買つてこよウ……」

凛は独り言つ。

と、そのとちも風呂場から綺麗な歌声が聞こえてきた。

雪音が何か歌つてゐるのだろう。

聞いたことのない唄だが、扉越しに聞こえてくる雪音の澄んだ歌声が耳に心地よい。

当然のじとく単音でしかないはずのその聲音は、風呂場の反響も手伝つてか、非常に耳当たりのよい優しい和音のように聞こえた。なんだか心がふわりと包まれ浮遊するようなやすらぎを感じる音色だつた。まるで聴く者の心を丸」とたひつてしまふ。不思議な旋律が凛の心音に重なつていく。

（そつか。ただの推測にすぎないけど ）

凛は思つた。雪音が以前に出会い、彼女に名を付けたという男。その男が『雪音』と名づけたのは、この歌声を聞いたからではないだろうか。

そう、これは雪の音だ。

静かな夜に降る雪の音。聞こえるはずのない神秘の韻。それが雪音の歌声となつて耳元に届けられるのだ。

何かに吸い寄せられるように、凛はそちらへ近寄る。

耳を傾けて シャワーの音が聞こえてきた。

雪音の歌声に、不規則な水飛沫の音が重なる。

壁越しに届くその不調和な旋律は、凛にとつて初めてのもので、先程とはまた違つた意味で妙に心臓の鼓動を高鳴らせる。不意に。

いつも自分が使つている浴室で白雪の美女が水を浴びてゐる姿を想像してしまつ。

艶やかな黒髪 それとも銀だらうか が流水に濡れ、きめ細やかな白い肌に張り付き、そして、なだらかな素肌を冷水が伝つていいく……。

「い……いけない、いけない！ 何を考えているんだ僕は！」

我にかえつて邪念を振り払つた。

雪音が来てからというもの、自分はどうも落ち着きがない。学校では魅魚に翻弄され、自宅では雪音に 悪意がないとはいえ振り回される。まだ雪音と暮らすようになつて一日一日だというのにこの有様では先が思いやられる。

「でも……」

こんな生活も嫌ではなかつた。

凛は一人暮らしとしうものが寂しくて仕方なかつた。

小学生の頃に両親を亡くし、中学卒業までは親戚の家で面倒を見つもらつていた。ありがたいことに叔父も叔母もよくしてくれたが、どうしても自分は迷惑をかけてしまつてゐるのではないかという気持ちが拭えず、むしろ自分の方から独りになろうとさえしていた。

そして高校に入るのをきっかけに、一人暮らしを始めた。

学校では幸太郎や魅魚のような仲の良い友達もできたが、それでも自宅に帰つてくると、不意に独りの寂しさが襲つてくる夜が何度も

もあつた。

人間とは孤独な生き物だ。そつであるからこそ心の支えとして他者を求める。しかし、それは友人という存在では担いきることのできない役割であるし、凛自身それを友に任せようなどとは思つてもいない。故に、凛は孤独だつた。

それを考えるとこの『自分を待つてくれている人がいる』という安心感がどんなに素晴らしいことか。

雪音が自分にとつてどんな存在か、その答を述べると言われてもすぐにはできない。突然現れた迷惑な居候、しかし、それ以上の何かを凛が感じているのも確かであつた。

彼女の新鮮な迷惑さは、妙に心地がよかつた。

「良い水だつた」

一声。

風呂場から雪音が出てきた。

「あ……あつ！ ああ！」

雪音の姿を見るなり、凛は顔を真つ赤に染め、口をぱくぱくさせ
る。

「ゆゆ、ゆつゆゆゆ雪音さん！」

「ん……？ どうかしたのか。そんなに顔を赤くして
凛がそうなるのも無理はない。

雪音は全裸だつた。

濡れた黒髪をバスタオルで拭きながら、一糸まとわぬ強烈な白美の裸身を惜し気もなくさらけ出していた。濡れているために身体に張り付いている長髪が艶めかしさを助長している。まだ身体は若干濡れていて、すらりと伸びた足を伝つて、水が床を濡らしていた。

「ふ、服つ！ 服を着てください！」

雪音の身体を指さしつつ、力一杯目をつぶりながら叫ぶ。

「なんだ。そんなことか。良いではないか。女同士、何を恥ずかし

がることがある

(そういえば……僕、今は女の子なんだつた……)

凛は思い出すが、

「でもだめです！ 着てください！」

全力で食い下がる。ここで同調してしまつたら、凛は人として大切なものを捨て去ることになつてしまつ。幸太郎よりも先に変態の極地に到達するわけにはいかない。

雪音は、むうー、とつまらなさそうな顔をしたが、凛の必死の訴えが届いたのか渋々了承した。

「ま、恥じらいを持つというのも女として大切なことだな。……ふむ

しばし雪音は考え込んで、

「そうだ！ せっかくだからそなたの服を着てみたい！ うちもたまには和服以外のものを着てみたいのだ」

ぽんと手を叩き、満面の笑みで言った。

「わ、わかりました。貸しますからとりあえずタオルで身体を隠してくださいっ」

凛は急いでタンスの中から先程買つてきた服を取り出す。背丈は凛がわずかに下回る程度なので服のサイズは問題ないだろう。服を持つて風呂場の前へ行く。

雪音はその間に凛の頼みを聞いてくれていたらしく、身体にバスタオルを巻いていた。足元は相変わらず濡れたままだつたが仕方ない。

凛は洋服とスカートを手渡した。生地が厚めの黒い服で、胸元あたりにギャザーが施されている。サイズは若干大きめで腰のあたりまで覆つてくれる。スカートはシンプルなもので、これも丈は長め。魅魚曰く、男であるとバレにくい服その一だそうだ。

「んむ。かたじけない」雪音は服を受け取ると、風呂場へと戻つていった。

田の前で着替え始めなくてよかつた、と凛はほつとする。

数分して、雪音が出てきた。

「なかなか上手く着られずに手こずつたが……どうだ、似合つか?」
雪音はくるりとその場で一回転してみせた。スカートが靡き、黒
髪が宙を泳ぐ。

「あ……は、はい! きれいです。とっても」

正直な感想だった。純白の和服に身を包んだ雪音も綺麗だったが、
それとは正反対の黒でまとめられた洋服姿も落ち着いた大人の雰囲
気があって良い。

「そうか! ならばよい。うちもこれが気に入った!」

そう言って、機嫌よくスキップをするように部屋の中へと駆けて
いった。

「それじゃ、これ食べていいださー。ほ……私はちょっとお風呂入りますから」

凛は凍つたままのから揚げを皿に盛り付けると、それをテーブルへ運んだ。温める手間が省けるのでこれはこれで楽だなとも思つ。

「むう……今夜はこりつけではないのか」

雪音が不満げに言つた。

「もう無くなっちゃつたので明日買つてきますね」

「そりか……なら仕方ない。楽しみにしている」

雪音はシンと不満そうに唇を尖らせながらも納得する。

凛は着替えを持つと風呂場へ向かつた。

魅魚から女物のパジャマを借りていたのだが、やはりそれを着るのに大きな抵抗があつた凛は着替えとしてジャージを着ることにした。

昨夜は男物のジャージを着ていたらバレてしまつとを考えたが、学校指定のジャージであれば、男子と女子との違いは見た目に大差ないで大丈夫だろう。雪音がそこに気づくとも思えない。それに寝るときも楽だ。下着ももちろん男物である。

凛は風呂場のドアを開けた。

「う

そして、息を呑んだ。

「北極……」

連想したのはまさしく氷河 氷の世界。

風呂場は凍りついていた。浴槽には冷水が溜められており、そこに無骨な氷塊が浮かぶ。壁は氷の膜で荒々しくコーティングされて

いて、もじこに白クマでもいれば、北極の一部を切り取つてきて貼り付けたと思えるような光景だった。

「あ……寒すぎる」

凛は自分の身体を抱くよつとして擦つた。身震いが止まらない。ただでさえ外では雪が降るほど気温が低いといつのに、風呂場は冷凍室のようになつていて。おそらく雪音にとつてはこれこそが快適な環境なのだろう。彼女が冷蔵庫の中を氣に入つていたのも納得できそうな気がした。

浴槽を使うのは諦め、シャワーだけで済ませることにする。このままでは寒いので、壁に熱いシャワーをかけて氷を溶かした。わざと身体を洗い、ジャージを着ると、風呂場を出た。

部屋に戻る凛の姿に氣づくや否や雪音が声をかけてきた。

「待ちくたびれたぞー。腹が減つて死にそうだー」

雪音の前には、先ほど出したから揚げがそのまま残つている。文句を言いたげな表情で凛を見ていた。

「あれ。から揚げは気に入りませんでしたか？」

凛はテーブルを挟んで雪音と向かい合つよつに腰を下ろす。

「そつではなーい。うちはそなたが風呂から出るのを待つておつたのだ。一緒に食べた方が美味しいのは当然であろう。まあ、食べよう。一緒に

「一緒に」

「えつ……」

凛の心臓がドキリと跳ねた。胸が締め付けられるような感覚とともに。

「あ。待たせてすみません。それじゃ、自分のをすぐに用意してきますね」

急いで立ち上がり、台所へ行くと自分のから揚げを冷凍室から取り出しレンジへ入れる。

（ふう……）

凛は一息つき、額に手を当てる。

慌てて席を立つたのは、すぐに自分の食事を用意するためだけではなかつた。

雪音に、今の自分の表情を見られるのが恥ずかしかつたからだ。凛は鏡を見ずとも自覚できるほど、驚きと喜びの入り混じつた幸せな笑顔を浮かべていた。

雪音の一言が 嬉しかつた。

待つていてくれた それが嬉しかつた。

単に食事を一緒にとるつというそれだけのことだったが、それが凛の心にはとても強く響いた。まるで心の前に立てかけた壁など簡単に通り抜けて、あつさつ心の鐘を叩き鳴らされてしまったような不思議な感覚だつた。

「やつぱり……うん。ひとつじやないつて、いいな」

凛は誰にも聞こえないよつて、小さな声でそう呟いた。

部屋の明かりを消した。凛は敷いた布団へ横になると、毛布をかぶる。

雪音は昨晩と同じように置の上に直に寝転がった。凛が布団も無しで痛くないのかと尋ねると、「問題ない」と一言で返された。部屋には、街灯や月明かりによる微光がカーテン越しに当てられている。とはいえた家具の輪郭がつづらわかる程度で、暗いことに変わりはない。

凛は目を閉じ、そのまま眠ることにする。

すぐ近くに雪音がいるため自然と緊張してしまい、逆に意識がはつきりしてきてしまうが、できるかぎり何も考えないように努める。昨晩は雪音という未知の存在に対する恐怖や不安による緊張が大きかつたが、今は親しみや、雪音に対する興味という意味合いでの緊張が強かつた。

数分して、

「起きてあるか」

雪音の声。

暗いので彼女の表情まではわからない。

「起きていますよ。どうかしましたか、雪音さん」

何かあつたのだろうか。雪音の場合、何を言い出すかわからないので凛も色々と予想してみるが、やはり見当はつかない。

「……いや。なんとなく、声をかけてみた。それだけだ。邪魔をしてすまぬ」

意外にも雪音の発言に意図はなかつたようだ。

「邪魔だなんて、そんなことないですよ。私だけて眠れなくて退屈していましたし」

初めてすんなりと自分のことと『私』と呼べたことに安心と悲し

みを感じつつ、凛はせっかくなので雪音と話をしてみることにした。出会つてから「たごた」の連続だったので、ゆっくり落ち着いて話をする機会も無かつた。

「雪音さんは、雪女なんですね」

「うむ。そうだ。それがどうか……んう。そなた。もしや、まだ信じられぬと申すか」

「い、いえ。そうじゃありません！」

また雪女の証明と称して奇怪なことをされでは堪らない。危惧した凛は慌てて否定し、気になつていてことを尋ねた。

「どうして男嫌いの雪音さんが、わざわざ人間の住む町へやつてきましたか」

雪音は極端なくらいに人間の男を嫌つてゐる。それなのにわざわざ人間が住む地域にやつてきたのにはそれなりの理由があるはずだ。「うちが人里へ下りてきた理由か……うむ」

雪音は考えるようにしばしの間を置く。

そして、真剣な声でゆっくりと、

「ふむ……他人に話すのは、少々照れ臭いが……そなたなら、よかうひ。命の恩人でもあるしな」

雪音のこゑの方向から、ガサガサ……と物音がした。

何だらうと、凛はそちらを振り向く。

暗くてよくわからなかつたが、すぐ目の前に人の気配を感じ、雪音がこちらへ近付いてきたのだと理解した。布団で寝る凛の隣布団と畳の境目辺り　　で雪音は再び横になつたよつだ。

「気恥ずかしいからな……小声で言うぞ」

「はい。しつかり聞いています」

小声で話す雪音と同様、凛も小声で返す。

「む、馬鹿者。そんな風にかしこまられたら言い辛いではないか」「すみません……」

「別に謝らなくともよい」

「す、すみません……！　あ、また……」

「はは。そなたは面白いやつだ。では……」

「雪音は仕切り直すように咳払いをひとつして、教えてやる。単純なことだ。うちはな。　家族が欲しくなつた」

「家族……」

予想していなかつた言葉であると同時に、それは凜自身が心に抱えている気持ちと似ている気がした。

「雪女の場合、人間でいう女と男のように対になる存在が無い。しかし、子は出来る。それは雪わらしや雪ん子と呼ばれる類のものだ。創り方は……まあ色々あるのだがな。雪を基にして精氣を注いで創り出した人形のようなものであつたり、実体を持たせずに　いわば靈体のような状態で人間に憑依させる場合もある。

たいていの雪女は大人になると雪わらしを作り、我が子として育てることを楽しみとするのだ。本来は自分の分身や身代りとして創られていたものだが、いつの間にか風習も変化し、今では人間の子育ての真似事をする雪女が多いのだ

「なら、雪音さんも雪わらしを創れば家族が……」

家族ができる。男と関わる必要もない。単純だが的を射ているはずだ。

その凜の考えに、雪音はもどかしそうな声で答える。

「それはできぬ。うちは少々他の雪女と事情が違つておつてな。能力的には創れぬことはないのだが……しかし創るわけにはいかぬのだ。山の捷で禁止されている

「創りたくても創れない……」

「つむ。しかしそれで簡単に気持ちが割り切れるものでもない」

雪音の口調が段々と熱のこもつた、しかし沈鬱さを内包したものへと変わっていく。

「あるとき、うちの住む雪山に人間の親子がやつてきた。うちはそ

れを眺めているだけだったが、その仲睦まじい姿を見ていて……ふと心中に沸いた小さな感情に気がついた。家族が欲しい、我が子が欲しい、独りは嫌だ、独りは寂しい。突然湧いた初めての感情にうちは戸惑いを覚えた。それでも最初の頃は耐えていたのだが……それにも限界がきた

そして雪音の口調はさらに転じ、静かなものに変わっていく。「抑えられない気持ちをどうしてよいのかわからず、気づけばうちに里へと下りてきていた。一時の気の迷いで、人間の男を誘惑しようとしたのかもしれぬ。子が創れぬならせめて番をと自棄になつていたのかもしれぬ。

しかし、いざとなつてみれば男嫌いのうちがそんなことを出来るわけもなく、結局はただ町を彷徨うだけとなり、気がつけば身体は衰弱しきつっていた。人間の男の精気を吸えばそれで済む問題だつたが、そなたも知つての通り、うちは他の雪女と違つて男から精気を吸わぬからな。そうして……」

あの交差点で凛と出会つたのだと雪音は付け足した。

「雪音さん……」

独りの寂しさを感じていた雪音の気持ちを思い、凛の声の調子も少し落ちる。

孤独を感じると胸が痛む。それは凛も同じだ。だからこそ雪音の感じていた寂しさを推し量ることもできるし、その辛酸や苦しみが自分のことのようにさえ感じられる。

そんな凛の胸中を察してか、

「だがな」

雪音は気を取り直すように明るい声でこう言つた。

「今のうちは寂しくないぞ。そなたが、いるからな」

雪音のその言葉は、凛にとって驚くべきものであると同時に、本当に嬉しい言葉でもあつた。

「…………」

しかし、どう返事をしていいかわからなかつた。自分も同じ気持

ちだと素直に言えばよかつたのだが、そう簡単に口は動いてくれなかつた。

それは、男としての凛ではなく、女としての凛に向けられた言葉だつたからだ。

凛が本当は男だと知ったとき、それでも雪音は同じことを言つてくれるだろうか。

いや、そもそも偽りを続けていた自分に、彼女の気持ちを受け取る資格があるのだろうか。

悪意はなく、流れでそつなつてしまつたとはいえ、雪音を騙しているという事実が凛の胸を締め付ける。雪音の言葉は嬉しい。しかし、偽りの 女の自分を演じてはいる限り、素直に喜ぶことはできない。

それでも今答えられる範囲で正直な気持ちを伝えよとい、ひとまず心を落ち着ける。そして、口を開く。

「雪音さん……。わ、私も……あれ？」
「…………すうー…………」

静かな寝息が聞こえた。

暗闇に慣れてきた目を凝らして見てみれば、雪音はもう寝つてしまっていた。

それは 。

登山が好きだった父の提案で雪山へ出かけた。

両親と一緒に三人での登山だった。

その山は、登山とスキーの両方が楽しめるというものだった。まず山を登り山頂へ行き、その後ペンションへ向かう。そこで一泊したあとにスキーをして帰るという計画が立てられていた。

天気予報では晴れ間が続くと出ていたし、実際、清々しいほど空は澄み渡っていた。

登山の楽しさも倍増し、どんどんと道を進んでいった。ざくざくと、長靴で雪を踏みしめる音が楽しかったのを覚えている。

雪山ではあるけれど、登山用に道はある程度舗装されており、それほど苦にはならなかつた。

雪に彩られた山道はまるで異世界のよつな、幻想的な美しさを感じさせていた。

山道を行く。

登山好きな父が慣れているのは当然のことだが、母も結婚前から父とよく登山をしており慣れていたらしく。

だからペースを合わせてくれていた。

もう少し早く歩いていれば、早くペンションにたどり着いていれば、違う結末が待っていたのだろうか。

ときおり休憩を挟みながら、無理のないペースで進んでいく。

山頂へついたのは昼間の三時頃だった。

雪で覆い尽くされた山々、どこまでも続く白銀世界。

そこから一望できる景色はまさに絶景で……だから、こんなにも綺麗な山が、まさか牙を向けてくるだなんて思いもしなかった。

遅めの昼食をとり、ペンションへと向かうことになった。

それは、その道の途中で起きた。

「吹雪いてきやがったな」

ぼそりと呟く父の声。

山の天気は変わりやすい。よく聞く言葉だ。

山頂から移動を始めて数十分後。

急速に雲行きが怪しくなり、雪が降り始め、その数分後には風が強くなった。

気づけば吹雪となっていた。

気温は急激に冷え込み、防寒着を着ているにもかかわらず身体が震え始めた。

あちこちで雪がうず高く積り、どこが道なのかはもう認識できなくなっていた。

積雪に足がとられ、思つように進めなかつた。

「まずい。早くここを離れないとい……。慣れているからってインストラクターをつけなかつたのは、まずかつた」

父の声。

今いる場所よりも上方は斜面が急になつていて、積もった雪が崩れてくれば雪崩に巻き込まれ、下敷きになつてしまふのは予想に難くなつた。

予定していた登山路は比較的安全な場所を経路にしてあるはずだが、積雪で道を見失つてしまい、すでに経路から外れてしまつてい

たのだろう。

「あなた、もう少しゅうくり進んでください。この子が……」

母の声に、気づかぬうちに歩く速度を上げてしまっていた父が振り返った。

「すまない。大丈夫か。歩けるか」

父の問いかけ。

体力の消耗は著しかった。幼い身体に慣れない登山と突然の吹雪という負担は大きすぎたのだ。

歩み寄る父。

その時だった。

まるで巨大な化け物の唸り声のような轟音が山全体に響き、一拍置いて、ぐぐもつた重音が荒波のように連続的な響きをもつて鳴り渡る。

「雪崩か！」

父が叫ぶが、

「いや……。今のは、遠方のようだな」

安堵の息をついた。その雪崩は、ここよりもだいぶ離れた位置で起きているらしかった。

巻き込まれることはないだろう。しかし安心はできなかつた。次にどこかで雪崩が起きた時、それに巻き込まれない保証はない。父に優しく抱がれた。

母は心配そうな顔でこちらを覗き込んでいる。その顔には痛烈な哀しみと不安が滲んでいるのに、それでも優しく微笑もうと努めてくれているのが、嫌になるほど印象的だつた。

いつの間にか、辺りは真つ暗になつていた。

夜の雪山は未だ吹雪が続いていた。

無理に道を進んだのも裏田に出ていた。道に迷つていた　遭難していた。

遭難

皆、衰弱していた。

食料はあるにはあるのだが、それとは別問題で、身体の衰弱が激しかった。

薄らいできた意識をなんとか繋ぎ止め、身体を抱きしめてくれている父の顔を見た。

いつもは逞しく莊厳なその顔は青ざめ弱っていた。それでも、抱く腕は力強かつた。

母も身を寄せてくれていて、不安と衰弱を必死に堪えながら温めようとしてくれていた。

地獄のような時間は、まるで無限の苦悶に思えた。

ふと 父の腕が緩んだ。

それに同調するように隣にいる母も田を開じ、寄りかかってきた。身を寄せているのではない。母の体重がそのまま圧し掛かっている。

まるで 意識を失つてこむような

「父さん……母さん……？」

途切れがちな意識をなんとか繋ぎ止め、必死に呟いた。

しかし反応はなかった。

身を呈して守ってくれている両親は、直接吹雪の猛威にさらされているのだ。

何か、とても嫌な予感が脳裏を過ぐる。

絶対にあつてはいけない、絶対に起きてはいけない事態。

しかし、それを感じていながら、何もできなかつた。悔しく、情けなく、許せなかつた。

ただ両親に守られながら、未来を恐れることしかできない。

だが、それさえ、はっきり認識できなくなつていつた。

やがて、深じるに沈んでいくよつて、意識は薄れていいく……。

霞む、視界の中。

田の前に、女性が立っていた。

母ではない。

視界も不明瞭な上に暗くてよくわからないうが、着物に身を包んでいる若い女性。

その女性がゆっくりと、じらへやつてきて片膝をついた。女性の手がじらへ伸びる。

力なく垂れた頭を起こされた。指先で顎を持ち上げられていた。見つめる女性の瞳が妖しく光った、よつた気がした。

「死ぬには まだ 」

冷たく響く綺麗な声だった。

その女性は静かに顔を近づけてきた。そして、唇と唇が重なった。

感じたのは冷たい何か。

それは唇の冷ややかさだけではなかつたよつと思つ。

表面的には冷たく、けれどそれに反して芯は熱い得体の知れない何かが身体へと注ぎこまれるような、不思議な感覚だった。間もなくして、意識は暗転していく。

それは 小学五年生の、冬のある日。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9979w/>

スノーチャイルド

2011年10月10日03時15分発行